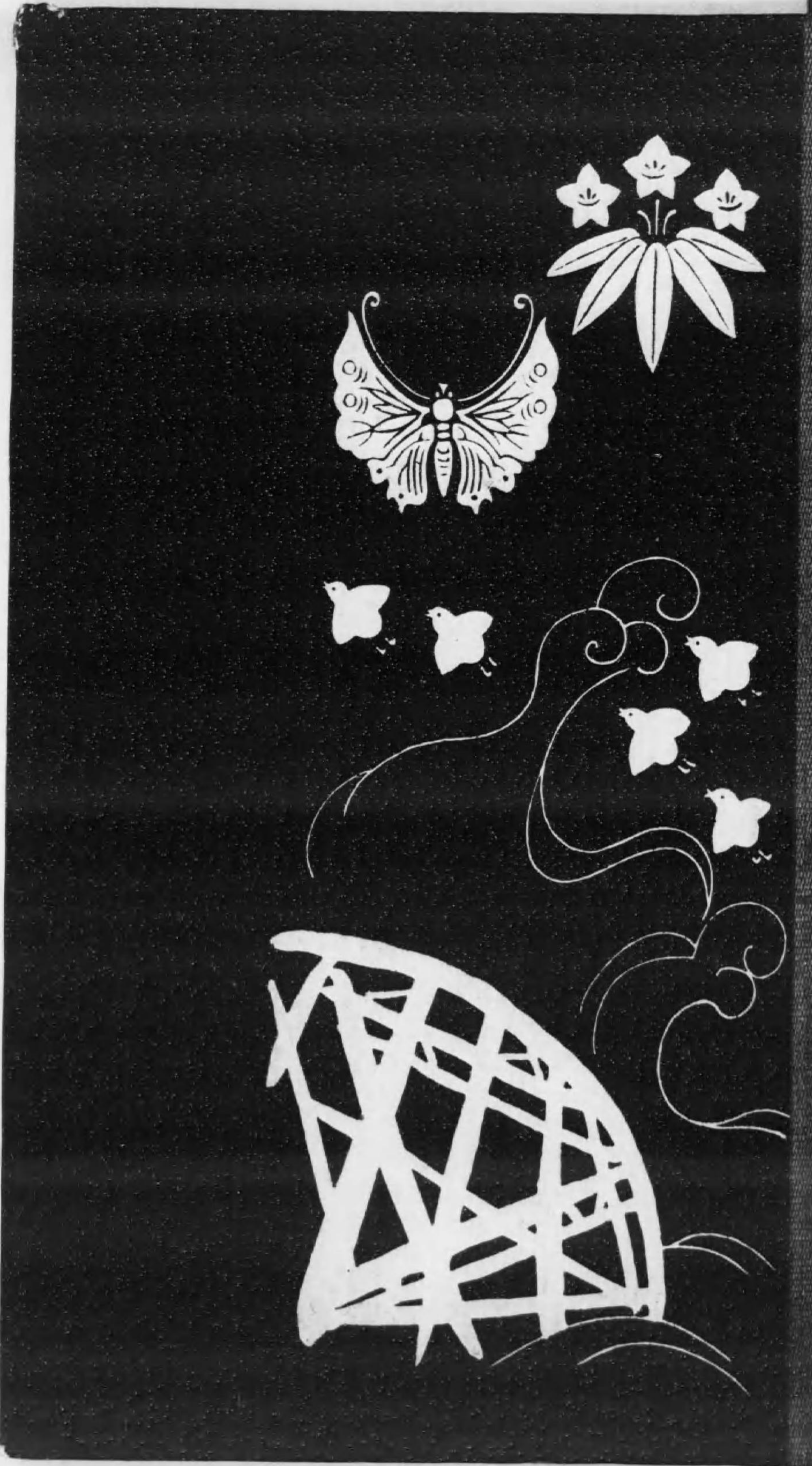


始



日本書紀



13  
880



東京女子高等  
師範學校教員

決戦

澁谷義夫著

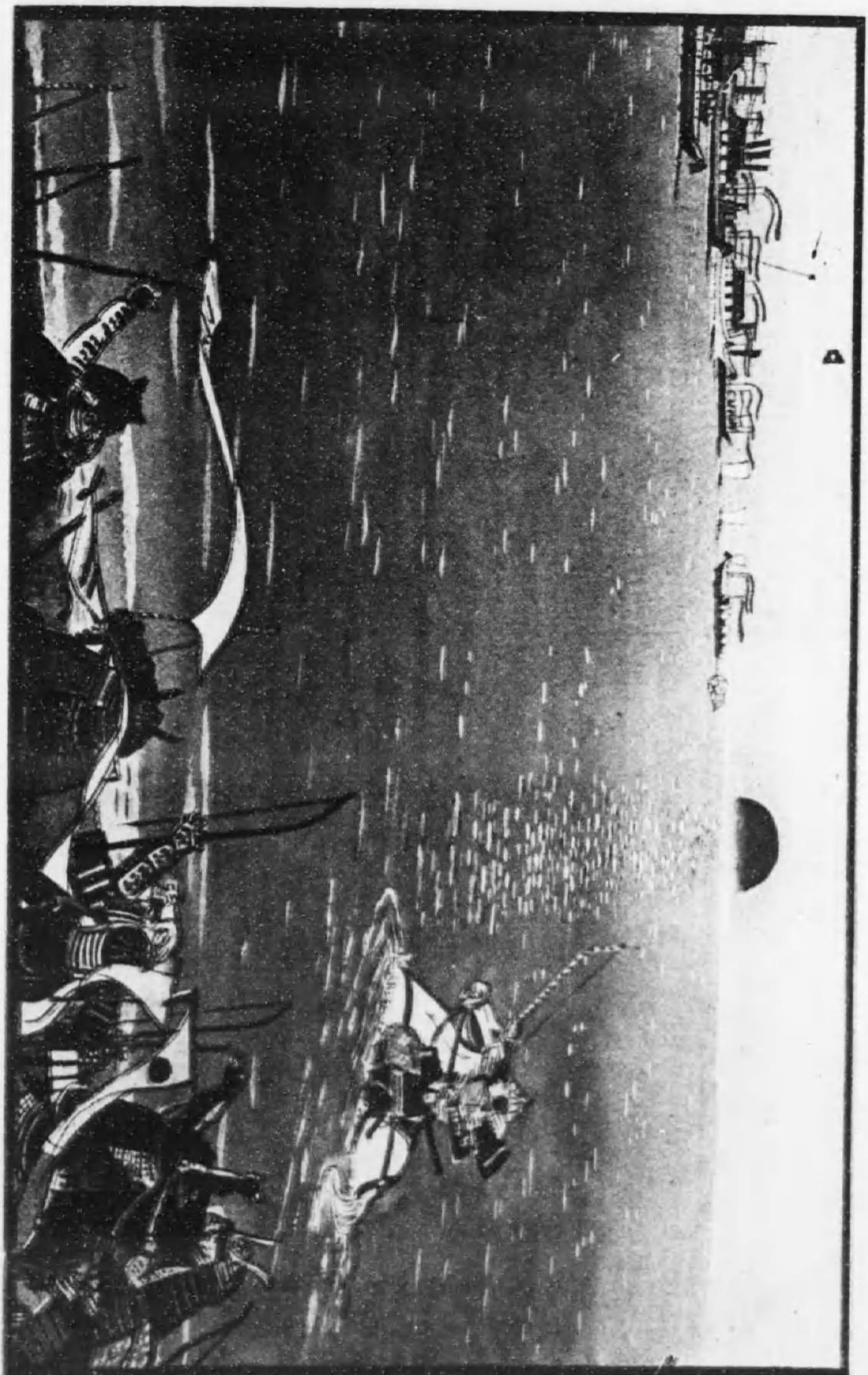
の日本歴史

源平の巻下

天地書房發行

大正  
13. 10. 29  
内交





P

目次

一、鴨越の逆落

- 一、一の谷
- 二、大松明
- 三、道案内
- 四、熊谷と平山
- 五、籠の梅
- 六、逆落
- 七、敗軍の人々

二、藤戸の渡

- 一、功名心
- 二、突撃

三、扇の的

- 一、逆櫓
- 二、軍陣の血祭
- 三、屋島へ屋島へ
- 四、能登殿の矢先
- 五、扇の的
- 六、弓流し

目次  
七、運の盡

四、壇の浦の海戦

- 一、先陣争
- 二、死物狂
- 三、遠矢
- 四、海の底へ

五、九郎判官の最後

- 一、兄との仲違ひ
- 二、吉野山
- 三、佐藤忠信
- 四、奥州落
- 五、高館の露

目次終り

學習参考 決戦の日本歴史 源平の巻下

澁谷義夫著

一 鴨越の逆落

一一の谷

前の巻で語つたやうに平家は木曾義仲のために、京都から逐ひ出されたが、その後、頼朝と義仲とが、同じ源氏同志で争を始めてゐる間に、また勢を盛りかへし、十萬餘騎といふ大軍になつた。

そこで、義仲が討たれたといふことを聞くと、都を取り戻さうと思つて、

鴨越の逆落

先づその足溜りとして、攝津の一の谷に城を構へ、そこに據ることとなつた。

城は攝津と播磨の境にあつた。南は瀬戸内海に面し、東と西と北とに山を背負ひ、生田を東門とし、一の谷を西門とし、入口は狭く奥は廣くて、中々要害なところであつた。海には何百艘となく、兵船を浮べ、陸には、こゝかしこに堀を堀り、逆茂木を備へ、二重三重に高櫓を構へ、立てなればた赤旗は火の燃えるやうである。たとへ幾萬の敵が押し寄せて來ても大丈夫である、實に盛んな勢であつた。

そこで頼朝は二人の弟、範頼、義經に命じて、この城を攻めさせた。範頼は五萬餘騎を率ゐて、東門の生田に向ひ、義經は一萬餘騎を率ゐて西門の一の谷に向ふこととなつた、元暦元年の二月初めのことである。

二 大松明

二月五日、義經は城の東北に當る三草山の東の麓に着いて陣をとつた。平家は義經が向つたと聞いて、資盛、有盛、師盛等の人々が七千餘騎を引連れて立向ひ、山の西を固めた。

義經は土肥實平を呼んで戦の相談をした。

「平家は山の西を守つてゐるさうぢやが、夜討にしたものぢやらうか、それとも朝になつて押し寄せたがよからうか」

すると實平がまだ答へぬのに、田代冠者信綱といふ人が進み出て、

「夜討がよからうと思ひます、平家は、戦は明日と心得て、油断してゐるに違ありません」

實平もまた膝を進めて

「田代殿の申されることは尤至極のこと、存じます。實平もそれがよからうと思つたのでした」

義經とて同じ考である。

「それはもとより義經の考ぢや。さらば急いで打ち向はう」と、自分から先頭に立つて進んだ。部下の勇士、皆勇みに勇んで道を急いだのである。

ところが生憎、月はもう山の端に隠れて、夜は眞暗である。道も不案内だ。元氣は溢れかへるばかりに盛んでも、これには皆困つた。木の下、岩角を手探りで漸く進まねばならぬ有様である。すると義經が大聲で呼び立てた。

「辨慶、辨慶、早く大松明を用意しろ」

「はつ」

と答へて辨慶は駆け出してゆく。

「はて、大松明とはどんなものだらう」

人々が不思議がつてゐると、まもなく、道傍の民家が次々に燃えだした。辨慶が走りながら火をつけて行つたのである。火は焰々と天をも焦すばかり、道の石ころまでが數へられるほど明るくなつた。

「これはく、なるほど大松明ぢや。妙々」

と、人々は何の苦もなく山腹を廻つて山の西に出、俄かにどつと、ときの聲をあげて平家の陣に切りこんだのである。

平家は、果して少しも用意がなかつた。皆、兜も脱ぎ鎧もといて、ゆる



ゆると前後もしらず眠つてゐた。俄かにときの聲がしたかと思ふと、天から降つたか地から湧いたかと、思はれるやうに、源氏の荒武者が飛びこんで来て、當るを幸、斬りまくつたのだから耐らない。弓も刀も投げすて、逃げ出し、誰一人、防がうとする者もゐないのである。たまにそれでも少し勇氣のある者が、刀を抜いて斬りつけると、それは敵でない。同志討をやつてゐるのである。散々な有様になつて一の谷に逃げこんだ。大將の資盛は、流石に恥かしいと思つたか、城には歸らないで、讃岐の屋島に渡つてしまつた。

總大將の宗盛はこれを聞くと非常は驚いて

「それは大變だ」

と諸將に命令して、三草山に向はせようとしたが、人々は皆、義經を怖れ

て辭退したので、平家方第一の勇將とうたはれた能登守教經に頼むことゝした。

教經は潔く引きうけた。

「軍といふものは命をすてゝかゝらねばならぬものぢや、敵を怖れるとは命が惜しいからであらう。今度は源平必死の戦、命を惜しんで何とする。人の厭ふ所はいつでも教經に預けてもらはう。承知致した」

と、すぐさまの兵を率ゐて三草山に向つたのである。

### 三 道 案 内

ところが、義經は勇に進んで軍を二つにわけ、七千餘騎を土肥實平につ

けて西門の一の谷に向はせ、自分は三千餘騎を従へて、城の北、鴨越に向つた。畠山重忠、熊谷直實、平山季重等の人々、それから武藏坊辨慶を始として旗本の勇士が義經に従つた。

義經は相變らず先頭に立つてゐた。部下の勇士は我劣らじと元氣に任かせて進んでゆく。しかし眞暗な夜である。山は峻しく大木は茂つて、ともすれば、道がわからなくなる。手綱をひかへて、休み／＼行くより外はなかつた。そこで義經は人々は見廻して云つた。

「味方の中に、誰かこの山の様子を知つてゐる者はゐないか」  
 部下は皆東國の武士であるから、顔を見合せてしばらくは答へる者もない。するとその中に別府忠澄とて年十八の若者がゐた。恐る／＼義經の前に出て云ふやう。

「山路に迷つた時は、年とつた馬を先に立て、ゆけ、さうすれば必ず道に出るものだ」と私の父が教へてくれたことが御在います。試めし  
 て見たらいかゞでせう」

義經はうなづいて

「なるほど、そんなことがあると聞いたことがある。よく云つてくれ  
 た」

と、年とつた馬をわり出して先頭に立て、そのあとについて行かうとした。

ところが、横合から、平山季重が進み出て、

「この山の案内は、私がよく承知してをります。先陣に命じていた  
 だきたい」

と云ふものだから、**烏山**や**熊谷**は皆、不思議に思つた。

「君は東國育ちで、西國は今度が始てではないか、それなのに案内を知つてゐるとはおかしいせ」

季重は、にっこり笑つて答へた。

「鹿のをる山は獵師がよく知つてをり、魚のゐる所は漁師が心得てゐる、吉野の花や明石の月は、里の人がかへつて知らないけれど、風流な人は知つてゐるものぢや、敵の籠つてゐる城、敵の控へてゐる山は、剛の者こそ案内者よ」

と、馬に鞭をあて、真先に進んだのである。人々も。

「平山め、面白いことを云ふ。負けてなるものか」

と、我後れじとばかり勇み進んだ。

しかし、さうは云つたものゝ、平山とて山の様子を知つてゐるわけではない。勇氣にまかせて進んでも、進めば進むほど、山は峻しくなり、谷はいよ／＼深くなつて来た。道もあるかないかと疑はれるほど、心細い有様だ。義経は辨慶を呼んだ。

「はつ」

と答へて出るのを見ると、黒革威の鎧を着、同じ色の兜をかぶり、黒塗の太刀をはき、黒塗の弓と黒羽の矢に、長刀を持つて、もと／＼色の黒い大入道が、上から下まで黒装束に身を固めた有様は、黒牛のやうである。

「辨慶、この通り木が茂つて道がよくわからない。案内者を一人見つけてこないか」

と云はれて、辨慶はする／＼と谷に下りて行つた。しばらく行くと、谷底

にちら／＼、燈が見ゆる。それから岩角にすぎり、藤葛や木の根をたよりとして、側に行つて見ると一軒のあばら屋があつた。中を覗くと、七十ばかりのお爺さんとお婆さんが、あろりにあたつてゐた。

「鎌倉殿の御弟が、このたび畏くも平家征伐の命をうけ、只今この上の山においでになつた。案内者をつれてこいといふお使になつて武藏坊辨慶といふ怖ろしい者がまゐつたぞ。早く出てこい」と、入口に突つ出つたまゝ、大聲で怒鳴り立てた。老人は急いで立ち上り、烏帽子をかぶつて出て來た。

「若い時分には、諸々方々を狩して歩いて、攝津、丹波の山々は知らぬ所もありませんが、今は年とつて、歩くことも思ふやうになりません。だが、息子が一人をります。お伴させませう、案内はよく心

得てをりますから」

と答へて、奥の方に向つて

「おい／＼」

と呼ぶと、

「はい」

と答へて出て來た。

「そんなら、わしについてくるんだ」

辨慶はその若者をつれて、義經の前にもどつて來た。

義經が松明をつきつけて、つく／＼見ると、立派な身體つきの若者で、天晴物の用に立つ男と思はれる。それから優しくいろ／＼と尋ねて見た。若者は少しも臆する色なく、はき／＼と答へた。

「年はいくつちや、苗字は何と云ふ」

「年は十七。住んでゐるところの山が鷲に似てゐるので、鷲尾と申し

ます」

「して。名は何といふ」

「名はまだ御座りません、親には三男に當ります」

「しからは、わしの名の一字をやらう。これから鷲尾三郎經春と名の

るのちや」

そして馬や鎧兜、太刀などを與へて仕度させると、若者は忽ち見違へるば

かりの立派な武士となつた。

義經はなほも様々問ひたゞした。

「どうちや、この山は人が通れるか。又馬はどうちや」

「さればで御座ります。これから先は、鴨越とて難所の中の難所、人も馬もわけなくは通れませぬ。上の七八十間ほどは屏風を立てたやうで、草も木も御座りませぬから馬の足を留めることが出来ませぬ。又、その下の五六十間ほどの所は岩角がつき出て人も通り兼ねます」

人々はこの問答を聞いて思はず顔を見合せたが、義經はまた尋ねた。

「して、そこは鹿が越ゐるか」

「いかにも鹿ばかりはそこを越ゐます。時候が寒くなれば雪を避けようとして丹波から一の谷に移り、暖かくなれば草の茂みに寝ようとして一の谷から丹波に歸るので御座ります」

義經はそれを聞くと、につこり笑つた。

「さてはわけのないことぢや。鹿も四足、馬も四足、西國の馬こそは知らぬが、東國の馬には鹿の通るところは皆馬場ぢや。何の恐れることがあらうぞ。進めや、人々」

と、意氣凜然として言ひ放ち、經春を先に立て馬を進めれば、將士皆、勇氣溢れるばかり、岩角を踏んで一散に山を馳せ登つたのである。

しばらくして、城の後の鷓越の頂上に辿りついた。眼の前がひろくと展けた。經春は馬を止めて、指さしながら説明した。

「御覽なさい。東の方にばんやり見わたるのは難波の浦、昆陽野のあたりで御座います。南は淡路島、西は明石の浦、海岸に續いて火の見わたるのは平家の篝火で、この下こそは、目指す一の谷で御座ります」

敵の城は今や脚の下にある。將士は皆、それを聞いて思はず武者振ひせずしをられなかつた。戦は明日の朝始まるのである。時刻がまだ早いからといふので、明日の功名を夢に見ながら、鎧の袖を敷き、木の根を枕として、人人はとろくと眠つたのであつた。

### 三 熊谷と平山

その夜、更けてから、熊谷直實はその子直家をそば近くに呼んで、ひそひそと囁いた。

「明日の戦は、崖を駆け下りるのぢやから、誰が先陣といふことも出来まい。わしは、宇治川の先陣を心かけたが、佐々木、梶原に先を越されてしまつた。それに向岸には馬も遅くついたので、義經公の

お供をして、法皇の御所に参ることも出来なんだ。今考へても残念で耐らない。そこでこれから、そつとこゝを抜け出て一の谷の西の木戸口に先陣しようと思ふのぢや。そちは何と考へる」

聞くより少年の直家は躍るばかりに勇み立つた。

「それは私も考へてゐたところです。義経公はいつも先頭に進まれるので、この殿の下については、逆も先陣は望まれません。さつき平山は、山の案内するなど、大きなことを云つてゐたが、今は音もしないところを見ると、きつと先陣を心がけてゐるに違ない、とにかく様子を見せにやりませう」

そつと家來をやつて見させると、果して平山の陣は人音もなく静まりかへつてゐる。

「案のとほり、先陣を狙つてゐるんだ。遅れてはならぬ、さあ行かう」

と、直實父子は一人の家來をつれ主従三騎、大急ぎで一の谷の西門に向つたのである。

しばらく行くと時の茶屋に人聲がする。平山に違ひないと思つたから少し廻り道をしてその下の方を、そつと通り抜け、間もなく、一の谷の木戸口に着いた。夜はまだ暗かつた。城の中はしんと静まりかへつて物音もしない。聞けるものは、たゞ、岸に寄せては碎ける波の音ばかりである。主従三騎は門前に突つ立つて、静かに様子をつかひつた。

成程、聞きしにまさる堅固な城の構である。山際から海の遠淺の所まで、大きな石を積みならべ、その上には櫓を二重に構へ、楯をならべて、矢を澤山に用意し、弓を幾張となく立かけてある。石垣の際や木戸口には、大

木を切り倒して逆茂木をこしらへ、海の浅い所には大船を置きならべてそれにも高櫓が作つてある。深い所には舢舨とも知れぬ兵船が浮んでゐる。これではどんな大軍が攻め寄せても容易に落すことは出来まいと思はれるほどであつた。

しかし、直實主従は少しも恐れなかつた。後へ續く味方とてもなかつたが、直實はつか／＼と木戸口に近づいて大音揚げたのである。

「武藏國の住人熊谷次郎直實、同じく小次郎直家生年十六歳、日本一の剛の者ぢやぞ。我と思はん人々は出合ひ給へ」

城兵はこの聲を聞いたが、誰一人、驅け出る者はない。たゞ方々の櫓から、櫓をならべて驅けまはる父子に、しきりに矢を、射かけるばかりである。直實は又も呼ばつた。

「命を頼朝公に捧げ、屍を平家の陣屋に曝らすのが、かねての我等の覺悟ぢやぞ、大將にても侍にても、我と思はん人々は、木戸を開いて打つて出よ」

静な暗に、その聲は高く響き渡つたが、平家の人々も、あまりの大膽さに呆れたか、それともこんな荒武者にはとても敵はぬと思つたのか、誰一人答へる者もない。たゞ矢を射かけるばかりである。直實はいよ／＼いら立つて叫んだ。

「直實父子はよい敵ぢやぞ。越中次郎兵衛はぬか、悪七兵衛はぬか、僅か二人に恐れて駈け出ぬとは何事ぞ、戦は直實父子のやうな者と取組んでこそ高名になるんぢや」

人を人とも思はぬ大言を吐いて罵しるが、相かはらず城中からは名乗る者



もなく、矢は益々烈しく飛んで雨の降るやうである。

直實は子の直家をかばつて馬を走らせた。直家は父に矢を中てさせまいと、その前に立ち塞がらうとする。命を棄てる覺悟はしても、流石に父子の情愛は深かつた。やがて直實は直家に向ひ、

「命をすてるのは何時とても同じぢやが、暗に戦ひ暗に討たれて見る人もなくつては犬死といふものぢや。今はまだ暗い。夜の明けるまで少し待つてゐよう」

と云つて、馬を休めてしばらくをりを待つことにした。

さて、宇治川での橋桁の先陣平山武者所季重は、今度もまた先登を心掛け、そつと鴨越の陣から抜け出て、一人の家來と共に一の谷の西門に向つたのであつた。しばらく行くと、一騎の武者が先を急いでゆく。

「はて、誰だらう」

と思つてゐるうちに、向から言葉をかけた。

「そこへお出でになつたのはどなたで御座るか」

「おう、成田殿か、わしは季重で御座る」

と答へてそのそばに近寄つた。その武者は成田家正といふものである。家正も先陣を狙つてこゝまでそつと來たところであつたが、平山に追ひつかれてしまつたのである。そこで家正は考へた。

「季重の馬は有名なよい馬だ。自分の馬は足が弱いから、一しよに進んだら後れるに違ない。これはだますに限る」

かう思つたものだから、何氣ない振りて馬を止めて平山に語つた。

「聞けば平家は前後から挟み撃にする計略ぢやとのことで御座る。あ

まり進みすぎて圍まれたら大變で御座らう。それに只一騎で先がけしたとて、見る人がなければ功名にもなり申さぬ。續く味方の軍勢を待つて押し寄せようでは御座らぬか」

平山も尤ものことと思つた。そこで馬から下りてしばらく休むことにした。家正はその隙を見て、馬に鞭をあて一散に駈け出した。

「さてはだまされたか」

平山はすぐさま馬に飛び乗り後を追つかけた。家正は逆も敵はぬと思つたから、

「實は馬が弱いので、あなたに續くことが出来ぬと思つたから、一寸だました次第、どうかお情にあなたの乗換の馬を頂戴いたしたい、御恩は忘れませんぞ」

と詫をしながら頼んだが、ぶん／＼怒つてゐる平山は見むきもしないで駆けぬけ、とつと馬を急がせていつた。しかし、十五六丁もいつたと思ふ頃、流石に氣の毒と思つたか、平山は乗換の馬を、道ばたの木につないでおいた。そして、

「あんまり忌々しいから返事もしないで、来て、可哀想だ、ここに置いてやれ」

と獨語を云ひながら、なほも急いでゆくと、薄氷を破つて蹄の跡がある。

「さては自分よりも先に云つたものがあるぞ、きつと熊谷に違ない」遅れてはいけないと、平山は必死になつて馬を急がせたのである。

さて、こちらでは直實父子が誰も相手になる者がないので、しばらく門前に休んでゐると、暗を破つてこちらに向つてくる蹄の音が聞える。直實

は、平山が来はしないかと、さつきから心配してゐたのである。それで直家にも

「平山はきつとこゝに来るぞ。木戸口が開いたらすぐ駆けこまねばならぬ、平山に遅れてはならぬぞ」

と固く云ひつけてゐたのである。

蹄の音を聞くと、直實は、身体をかどめて透して見た。二騎の武者がやつて来る。

「そこにお出でになつたのは平山殿か」

「いかにも季重で御座る。さういふあなたは熊谷殿か」

「いかにも」

と答へながら、二人はやがて一しよになつた。友達同志のことゝて、何氣

ない顔で話し合つてはゐるものゝ、心の中ではお互に負けるものかと思つてゐるのであつた。

さうしてしばらく渚に立つて、寄せてくる白浪に馬の足を洗はせてゐると、城の中から、笛の音が響いて来た。ひつそりと、静まりかへつてゐるから、その笛の音は高く低く、牙に渡り、澄み渡つて、今にも血潮を流す戦場の人とも思はれない。

直實は弓を杖ついたまゝ、しばらくそれに聞き惚れてゐた。

「さてもく、平家の人々は優しいものぢや、我等はかやうに鎧兜に身を固め、功名せうとて、こんな人をも敵とする、何といふ罪深いことぢやらう」

鬼とも組んで恐れぬ直實も、かう思ふと、思はず一滴の涙を鎧の袖に落し

たのであつた。

やがて、夜はほのくくと明け放れた。赤旗は、はたくと朝風に翻つた。平家の人々も漸く戦はうといふ氣になつてきた。

「さつきから、熊谷父子と名乗つて組まう〜といふ者がをる。後に續く軍勢もないのにと三騎、押し寄せた大膽さはどうぢや。日本一の剛の者と名乗るのを、たゞかへすのも面白くない。一つ生捕にして總大將のお目にかけてよう」

越中次郎兵衛盛嗣、上總五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、飛駄三郎右衛門景經、後藤内定綱等を始として血氣の若武者二十三騎、逆茂木をはねのけさせ、門を開いて、おどり出た。

「熊谷殿はごにおいでぢや。いざ組まう」

と、轡をならべてどつと駈けてきた。熊谷父子は、きつと身構へしてこれも馬を進める。

「さあこの隙だ」

と、平山主従は、いきなり横合から駈出し、

「武藏國の住人平山武者所季重、先陣するぞ」

と高く叫びながら、木戸口に突入した。

かくと見た平家方の二十三騎は

「あれ討つて取れ」

とすぐさまひきかへして木戸に入つた。熊谷父子もその後を追つて入る。

平家の軍勢は、熊谷父子が駈け入つたら取つて押へてやらうと木戸口に待構へてゐたが、今、平山に續いて、味方の二十三騎と熊谷父子が駈け入

つたのを見ると非常に驚いた。

「やあ、源氏の太軍が押し入つたぞ、これはかなはぬ」

と、ばらばら木戸口から逃げ入つた。櫓の上の兵はこの有様を見て口惜しがつた。

「敵は小勢だ。騒ぐな騒ぐな」

と口々に叫びながら、弓を取つて射とらうとした。けれど、平山主従六騎、熊谷主従三騎は、二十三騎の前と後とに一筋になつて、くるりくと城内を駆けめぐるので、敵を射ようとすれば味方に中る。味方に中てまいと思へば敵をもにがしてしまふ。矢を番へては控へ、控へてはまた番へ、心ばかりは焦せるけれど、どうしても射るをりがない。

二十三騎の兵も平山に組まうとすると熊谷が後から迫つてくる。熊谷に

立ち向へば平山に迫まられるに違ない。何しろ敵の馬は象のやうな大馬であるが、味方の馬は、はるかに劣つた弱い馬だ、一當て當てられたなら一耐りもなく蹴倒されさうである。人数は多いけれど、僅か五騎の敵に駆け立てられて寄りつくことが出来ない。たゞもう勢にまかせて馬を走らせるだけである。

しばらくして直實は平山に向つて云つた。

「君はくたびれたらう。しばらく休み給へ、」

と、平山を退かせ、父子二騎進んで二十三騎に當つた。

「さあ、こゝだ」

櫓の上からは、雨のやうに矢を放つてきた。しかし鎧が丈夫だから、矢は中つても皆はねかへつてしまふ。父子はいよく勇氣を奮つて馬を飛ばし

た。二十三騎の兵は、どうにかして組まうと思ふが、馬が弱いから思ふやうにならない。直實に組めば直家が手傳ひ、直家に組めば直實が一しよに向つて來さうである。父子は心憎いほど自由に馬を駆けさせ、一步もひかぬ決心の色を浮べながら、

「ひつ組め、ひつ組め」

と叫ぶのである。越中次郎兵衛は口惜しくて耐らない。とても近づくことが出来ぬものだから、癢に觸つて罵つた。

「大將軍に逢つてこそ命は捨てようが、誰が貴様のやうな者と組むものか」

直實は聞いて笑つた。

「盛嗣、よくも申したな、直實をさへ恐れるものが、何で大將軍に組め

るものか、さあ來い、東國武士の手並を見せてやる」

と罵りかへしたが、盛嗣は、とう／＼かなはぬと思つて進まない。そこで齒がゆいと思つたか悪七兵衛景清が馬を進めて來た。

「さらば、おれが組む」

「さあ來い、來れ」

直實父子は景清を睨みながら、すさまじい勢で景清に向つて來た。その有様は鬼をもひしぐばかりである。盛嗣はそれと見て景清をとめた。

「お止しなされ、あのやうな猪武者と組んで命をすてるは無益で御座

る。君の御大事は今日に限るまい」

かう云はれて、進み出たことは出てみたが、かなはぬと思つてゐた矢先だから、景清はこれ幸と引かへした。

そこでもう相手になる敵はない。熊谷父子は轡をならべ、蹄をならべて、我物顔に馬を乗りまはした。平家の人々は之を見て口惜しがるまいことか、「とても組むことは出来まい、この上は、馬を射るんだ」

弓をそろへて散々に射ると忽ち一本の矢はぐさとはかりに直實の馬の腹を貫いた。馬は高く躍り上つた。直實はひらりと飛び下りた。しかし、

「組まぬか〜」

と叫びながらなほも一步も退かうとしないのである。かくと見て直家は、敵を一人で引受けて父を援はうと覺悟をきめた。

「熊谷小次郎直家生年十六歳、戦は今日が始めてぢや、我と思はん者は來つて組めつ〜」

と、健氣にもたゞ一騎、二の木戸口に押し寄せて名乗りをあげた。

「さても〜、親に似た不敵者かな、あれ射ちとれ」

と、平家の人々はたゞしきりに矢を放つた。一本の矢が飛んで來て忽ち直家の肘に中つた。直家は馬を飛ばして父のそばに駆けて來た。

「傷を負ひました。この矢を抜いて下さい」

直實は傷を見たが、幸に淺い。流石に心配ではあつたが、勇氣を落させまいと、

「大したことはない、我慢しろ、今はひまがないぞ」と云ひすて、又も敵に向つたのである。

平山は門外に出てしばらく休んでゐた。今、直實は馬を射られ、直家は肘を傷けられたと聞いて、ふたゞび城中に突進して來た。すると平山の家來は、忽ち矢に中つて眞倒様に馬から落ちた。平山は大いに怒つて、飛び

こみざまに、いきなり家來を射た敵をひつ捕へ、馬の上で取つ組んで首を斬つた。

「一騎當千の剛の者、平山武者所季重、一番首を討ち取つたぞ」と高く呼はりながら城外に駆け出した。

かうしてゐる所へ、成田家正も主従三騎で駆けつけ、城内に突進して一戦し、又駆け出でた。家正はさきに、平山に追ひ抜かれ、急いで後を追つてくると、道ばたの木に馬がつかないであつた。

「平山がおいていつたんだな、どうせ、くれるのなら、あの時くれ、

ばいゝのに」

と、ぶつゝ云ひながらも、喜んでその馬に乗り、こゝに駆けつけたのである。

その中に、一の谷の寄手の土肥實平の軍が、續々とこゝに押し寄せて来た。先づ、五十餘騎の一隊が、白旗を真先に立て、勇ましく乗りこんでくる。直實は「誰か」と尋ねると、

「信濃國の住人村上次郎基國」

と云ひすて、突進し、又一戦して門外に出た。續いて秩父、足利、三浦、鎌倉、横山、兒玉、猪股等の人々、我もくと白旗をさし上げ、二十騎、三十騎、百騎、二百騎、入つては戦ひ、戦つては出、入り代り、立ち代り、突撃すれば、城兵も必死になつて防ぎ戦つた。赤旗白旗入り亂れ、ときの聲、矢叫びの音は、浪の音をも消すばかり、戦はいよゝゝ烈しくなつたのである。



五 籠の梅

この時、城の東門生田の森には、範頼の率ゐる五萬餘騎が、白旗を雲のやうに靡かせながら、ひし／＼と押し寄せてゐた。

中にも梶原景時の次男平次景高は、真先に進んで、勢烈しく木戸口に押し入らうとする。範頼は之を見て心配した。

「木戸口は四國九州の精兵が固めてゐる。無勢では危いぞ、味方の大勢を待つて押し寄せろ」

と、人をやつて引き留めさせると、景高はにつこり笑ひ、聲高く一首の歌を吟じた。

武夫の、とりつたへたる梓弓

引きさては、人のとまるものは

そして見向きもせず突進する。人に遅れることの厭ひな武藏相模の勇士達、何とてぐつく／＼してゐよう。皆、我も我もと争ひ進んでゆく。

しかし、城は嚴重な構へである。守る兵は待ち構へてゐたことゝて、源氏の大軍を物ともせず、櫓の上から一齊に矢を放つた。雨の降るやう、煌の飛ぶやうである。寄手も必死になつて攻め入らうとするが、どうしても破ることが出来ない。

河原高道とその弟盛直の二人は、かくと見るより馬を飛び下り木戸口に走りよつて

「今日の先陣は、武藏國の住人河原太郎高道、同じく二郎盛直」と聲高く名乗りをあげながら、逆茂木を登り越ね登り越え、する／＼と城

門を傳はつて、城の中に躍り入つた。すると平家方に眞鍋助光といふ弓の上手がゐた。高櫓の上に矢をおしひろげ「敵や來れ」と待ち構へてゐたが、これを見ると、強弓を引きしぼり、「やつ」と放つと、その矢は兄の高道の腰に中つた。流石の勇士も痛手に耐へ切れず、弓を杖ついたまゝ立ちすくむと、弟の盛直は驚いて、兄を肩にひっかけ退かうとした。助光はのがさない。二の矢を番へて射放せば、またも盛直の腰に中つた。もう一步も進めない。兄弟は齒を喰ひしぼつて櫓の上を睨むばかりである。助光の家來が駆けよつてくる。しかし太刀をとつて戦ふ氣力もなく、見す／＼首を取られたのである。

藤田行安も河原兄弟に續いて、城内に入らうとしたが、逆茂木にひつかかつて思ふやうにならぬところを、これまた助光に射落された。藤田の甥

に江戸四郎といふ者がゐた。年十七の若者で、勇ましく突進したが、散々に戦ふうちに、胸板を射られて弱るところを、阿波國の住人櫻間良連のため討ち取られた。

眞鍋助光は櫓から下り、河原兄弟の首を刀の鋒に貫いて木戸の上に立て、

「源氏の人々、これを見よ。進む者は皆かうしてくれる。さあ、かゝらぬか」

と、手をあげて招いた。

梶原景時は之を見ると一方ならず憤慨した。

「さて／＼、口惜しい人々ぢや、後に續く者がなかつたからこそ、兄弟二人ながらに討たれたんぢや。さあ來い、者共つ」

と、部下五百騎を率ゐて、幕地に攻め寄せた。木戸口近くには逆茂木がある。景時は、

「それつ、あの逆茂木を引き抜け」

と號令した、兵卒共は、飛んでくる矢をもものともせずばらくと走り寄つて、片端から、

「わいや〜」

と聲をかけながら、見るまに引き抜いてしまつた。城兵は必死になつて矢を射かけそれを邪魔したが駄目であつた。そこで景時は、

「さあ、戦場は平になつたぞ、進め〜」

と部下を勵まし、その子源太景季と共にさつと駆け入れれば、今まで逆茂木を引きぬく味方の兵を射させまいと高檣に向つてしきりに矢を放つてゐた

騎馬の兵は、大將に後れじと、先を争つて進んだのである。

城の中からは知盛、重衡の兩將が、かくと見て二千騎を率ゐて突出し、景時の兵をひつ包み一騎も残さじと攻め戦つた。どちらも勇將、いづれ劣らぬ勇士達である。一步も退かず必死になつて二時間あまりも戦つたが、衆寡敵せず、やがて景時は部下をまとめてさつと退いた。

ところがどうしたものか景季の姿が見えない。

「さては敵にとり圍まれたか。景季を討たれては生き残つたとして甲斐がない。よし、この上は源太の敵とひつ組まう」

又もや兵を率ゐて突進した。

「相模國の住人鎌倉権五郎景政の後裔梶原平三景時とは我ことぢや。子息源太景季の行衛をたづねてひつ返した。我と思はん者は組め、

組めつ」

と呼ばつて群がる敵の中に、わき目も振らず突貫し、當るを幸、斬りまはつた。

その時、源太景季は、三十餘騎の敵に圍まれ、兜をうち落されて髪を亂したまゝ、大刀を揮つて渡り合つてゐた。忽ち平家方の勇士菊地高望とひつ組んで、首を取り、刀の先に貫いて駈け出て來た。

「無事でゐてくれたかつ」

流石の景時も飛び上るばかりに喜んだ。勇氣はこゝに百倍し、景季を後にかばつて戦ふと、景季も兜をかぶり、またも引き返して、父と馬を馳せなれば、右をつき、左をついて、奮ひ戦つた。木戸口近くで敵方から、

「讃岐國の住人眞鍋四郎、同じく五郎」

と名乗つて立ち向つて來てが、景時は忽ち四郎を討ち取り、五郎助光は景季に傷けられて退いた。

景季は、木戸口近く咲き誇つてゐた梅の枝を拆つて、矢を射盡して空になつた箆に挿した。花は散つても香は鎧の袖に残るかと思はれる。

「さて、優しい武士ぢや」

平家方の將士はそれを見て皆、感心したのである。

かうして、源氏の大軍は新を入れ替へ、二百騎、三百騎と、かはるゝ城の中に突進して攻め戦ひ、討ち落され、射落され、或は敵の首を討ち取つて功名手柄をする者も多かつたが、城兵も大勢であるし、城も堅固であるからしばらくはいつ落城するとも見わなかつたのである、

六 逆 落 し

さても義經の三千餘騎は、鵜越の険はしい坂道を或は上り或は下り、漸くの思で、一の谷の上に馬を立てた。東門、西門は今、戦の真最中である。夜はすつかり明け放れて、朝風が快く將士のほてつた顔を撫でた。

だが、美しい景色も今は人々の眼に入らない。見るものは、たゞ靡く赤旗白旗と、入り亂れて馳せちがふ人や馬、聞えるものは、ときの聲と矢叫びの音ばかりである。

「さらば急いで駆せ下らう、後れては仕方がないぞ」

義經の言葉に、人々はきつと脚の下を見下した。成程、かねて聞いたにぞして危い場所である。上の方七八十間ばかりは小石交りの白い砂が上を蔽



うて馬の足を立てることも出来ぬやうであるしかし義経はひるまない。

「鹿の通ふところは馬の馬場ぢや、落せ、落せつ」

と嚴かに號令したが、さて落すにも道があるわけでない。崖のきはに進まうとすると、馬が恐れて跡へ〜と引き下る有様である。

「それならば物は試しぢや。馬の落ち様をも見、源平の勝負をも占つて見よう」

と義経は白い鞍を置いた馬と黄色の鞍を置いた馬を引き出し、

「白い方は源氏、黄色は平家ぢや、追ひ落して見ろ」

と、無理やりにそれを追ひ落すと、滑るともなく、轉ぶともなく、するすると砂の崖を下り、中程の岩の上に立つたと思ふまもなく、又躍つて下についた。黄色の方は、岩角にても打ちつけたと見える、そのまゝ地にへた

ばつて起さ上らない。白鞍置いた馬は、勢よく立つて上を仰向き、二聲三聲高く嘶いて、やがてそばの草を食ひ始めた。

「あれを見よ、白い馬が無事なのは、源氏大勝利の兆ぢや。馬ばかり落してもこの通り、のり手さへ注意して落したならば千に一も過

はあるまい。さあ義経を手本にして、見事に落せ、者共つ」

と、義経は馬の後足を折り敷かせながら、する〜と眞先に下りた。之を見て、

「大將軍に續けつ」

とばかり、手綱ひきしめ部下は皆、同じやうにして崖を下り、中程にある壇に立つた。そこから下を見ると、屏風を立てたやうな崖になつてゐる。滑ることも出来ぬ、まして歩くことは思ひもよらない。鳥でもなければ進

ひことも退くことも出来ぬことになつた。人々は流石にこゝに來て、たゞ顔を見合せるばかりであつた。

すると相模國の住人佐原十郎義連が進み出た。

「わいつ、何程の事があるつ、義連先陣して見せよう。續き給へ、人々」

と、手綱ひきしめ鎧を踏んばり、さつと鞭をあて、馬を落した。義經はそれを見て、

「義連を討たすな、者共つ」

と大音あげ、續いて馬を跳り下らせた。人々は皆、目を塞ぎ、馬にまかせて、下る外はなかつた。前の馬の臀は後の馬の鼻に觸れてゐる。三千餘騎一つなぎになつて跳り下つたのである。

ところが、一人、畠山重忠は

「こんな所を落して馬を傷けてはいけない。日頃はお前の厄介になる、

今日はお前をいたはつてやらぬ」

と、前足とつて馬を鎧の上から肩にひっかけ、椎の木をねち切つて杖とし、岩角を踏みしめ、しづくと歩み下つたのである。人々は、その有様に、驚くまいことか、

「人か、鬼か」

とばかり、今更ながら重忠の大力には舌を巻いて呆れはてた。

三千餘騎はかうして、少しの過もなく見事に城の中に下り立つた。

「これこそ八幡大菩薩の御利益」

人々は喜び勇んで、白旗をさつと掲げ、どつと叫んで敵陣に突貫した。

平家は東西の二門に氣をとられ、まさか、この險阻な崖から敵が寄せよ  
うとは思ひもかけなかつたことゝて、何の備へもない、そこへ、俄かに白  
旗があらはれ、ときの聲が上つたのだから、寢耳に水と云はうか、それと  
も、また大地震にでも襲はれたかのやうにびつくりし、敵を防ぐ所でない。  
驚きはあはて、逃げることさへ忘れる有様、そこを源氏の勇士が、當るを  
幸、薙ぎ立て斬りまくるのである、義経は大音あげて呼はつた。

「城は廣く敵は多い。味方の兵を傷けては損ぢや、早く早く、火をつ  
けろ」

例の辨慶はそれを聞くより、敵の陣屋に躍り入り、火を放つた。海からの  
風に煽られて、火は見る／＼、陣屋陣屋に燃へ移つた。

そこへ、範頼と實平とは、各々、東門西門を推し破つて城中に亂れ入つ  
た。敵を防げば火に攻められ煙に巻かれる。火をよけようと思へば敵に迫  
られる、その敵も一方ではない。三方から勢烈しく攻め立てるのである。  
平家の軍勢も今は耐へることが出来ない。かうして一の谷の堅城は脆くも  
陥つたのであつた。

### 七 敗軍の人々

三方の敵軍と猛火とに攻め立てられて、平家の軍勢は、防ぎ戦ふ勇氣も  
失せ、皆、海邊に集り、我先にと、船に乗りうつらうとした。

しかし、人はやたらに多いのに、船は少ない。我も我もと乗るのだから、  
見る／＼内に大船か三艘までも乗り沈められた。これでは全滅である。先  
に船に乗つた者共は驚いて、



「船には身分の高い人々ばかり乗せるのだ。次々の者は乗つてはならぬ」

と叫んだけれど、海邊に集つた敗兵は、こゝが命の瀬戸際だから、皆、船を目掛けて取り付き、跳び入らうとする。とめようとしても、とめられるものでない。仕方がないから、

「それ切り拂へつ」

と、船中の人々は、刀や長刀で容赦なく、船べりにすがりつく手を薙ぎ拂つた。片手を切られ両手をもがれて海に沈む兵士は何百とも數へ切れぬほどである。目も當てられぬ有様であつた。

總大將宗盛は、安徳天皇を奉じて早くから船に乗り移り、沖合に船をとめて、一門の大將達の集つてくるのを待つてゐたが、集らぬ先に源氏の兵

に追ひかけられて討ち取られる人々が多かつた。新中納言知盛や能登守教經等は助かつたが、知盛の子武藏守知章は父を助けようとして討死した。

三位中將重衡は生捕られた。越前三位通盛、その弟業盛、薩摩守忠度、備中守師盛、但島守經正、その弟經俊、越中前司盛俊等の人々はいづれも花々しく戦死した。中にも哀れなのは敦盛の最後である。

無官大夫敦盛は年十六の若武者である。唯一騎、味方に後れて、馬を海中に乗り入れ、沖の船を目掛けて泳がせた。萌黄匂の鎧に、鍬形うつた兜をつけてゐる。

黒糸威の鎧に身を固め、紅の母衣かけた武者が一騎、陸上から扇をあげてそれを招いた。

「そこを退かせられるは天晴大將軍と見うけ申した。返させ給へ。か

く申すは日本一の剛の者、熊谷次郎直實」  
人なみ外れて大きな聲だから、浪の音にも紛れない。敦盛は呼びとめられ  
て健氣にも引き返した。

上るのも待たず、熊谷は飛沫を散らして馬を乗り入れ、むんづと組んで  
浪打際にどうと落ちた。上になり下になり二三度は轉ぶと見わたが、熊谷  
は大剛の勇士、敦盛は十六の少年である。熊谷は苦もなく敦盛をねぢ伏せ、  
両方の膝で鎧の袖をふみ敷けばもう動かさない。そこで刀を抜いて、兜を  
押し上げて見ると、淡化粧を施し、齒を黒く染めた、女かと思はれるほど  
の美しい、氣高い少年ではないか。

「おう、美しい若君、我が子小次郎と同じ位の年頃ぢや」  
かう思ふと、斬らうと思つてあげた手もいつしか鈍つた。もの云ふ聲さへ

曇つた。

「どなたで御座るか、名乗り給へ、助けてあげよう」  
しかし、助からうと思へばそのまゝ船に行つたのである。日本一の剛の者  
と名乗られて、陸に引き返した以上は助かるつもりは少しもない。

「名乗らなくとも人が知つてゐよう、お前の爲にはよい敵ぢや、さあ、  
早く首をとれ」

少しも悪びれた有様がないのである。熊谷は心の中に考へた。

「天晴健氣な大將ぢや、この人一人討つたとして、負ける軍が勝てるで  
もない。討たなかつたとして勝てる味方の敗けるはずもないのぢや。  
今朝、小次郎が薄手を負うてさへ氣が、りであつたのに、この人の  
親が我が子の討たれたことを聞いたならば、どんなに悲しむことで

あらう。功名手柄がなんだ。助けてあげよう」  
一の谷の先陣を心掛け、命を惜まらず働いたのも功名手柄を立てたいばかりであつた。しかし今は、あまりのいたはしさに、功名を思ふ心もなくなつてしまつたのである。

「助けてあげよう、誰か見てゐる者はあるまいな」  
と、あたりに心を配り、見まはしたが、後を見て、はつと驚いた。味方の兵が駆けてくるのである。熊谷は思はず涙を流し、

「どうにかして助けてあげようとは思ひますが、あれ、御覽なさい、味方の軍勢が近寄つて來ます、とても見のがしは致しますまい。どうせ同じなら直實の手にかけませう」

泣く泣く刀をとつたが、敦盛は顔色も、變へない。言葉も變らない。

「さあ、早く首を取れ」

味方の兵がいよゝ近づいたので、熊谷は、我と我が心を勵して首をとつた。

鎧をといて見ると錦の袋に入れた一本の笛がある。

「あゝ、今朝、城の中で笛の音がしたのはこの人々の吹かれたのであつたか、さて、優しい人達ぢや。

それにつけても、弓矢取る身ほど口惜しいものはない、武士の家に生れなかつたならこれほど辛い目にはあはぬだらうに、さて、情なく討ち取つたものぢや」

と、しばらくは涙にむせんで、物思に沈んだのであつた。

熊谷は後でこの若武者が敦盛であることを知つて、首と笛とを、手紙に

添へて父の經盛は贈つた。笛は祖父の忠盛が鳥羽法皇から頂戴した小枝と云ふ有名なものであつた。熊谷はこの後、もう戦をしなかつた。そして程なく頭を剃つて出家したのである。

かうして、一の谷の城は陥落し、十萬餘騎と誇つた大軍も散々に撃ち破られた。平家一門の人々で討死したのも十人に上つてゐる。都を取り戻さうといふ望もうち砕かれてしまつた。そして、討ち洩された平家の人々は、淋しくも浪の上を讃岐の屋島へと落ちたのであつた。親を討たれ子に別れた数々の悲を船にのせながら。

## 二 藤戸の渡

### 一 功名心

元暦元年二月、一の谷の城が陥つて、平家は讃岐の屋島に退いてゐたが、都を取り戻したいといふ心は、一日も忘れたことがなかつた。しかし、思ふようには軍勢も集らない。そのうちにいつしか春も暮れ、夏も過ぎて、淋しい秋になつた。都を落ちてからまる一年になつたのである。木の葉を散らす風の音、叢になく蟲の音を聞くにつけ、思ひ出されるのは都のことである。月の明るい晩など、雁が列を作つて幾群も幾群も東へ飛んでゆく。しかし自分達は今なほ西にゐるのである。

君すめば、これも雲井の月なれど

なほ戀しきは、都なりけり

これは左馬頭行盛の詠んだ歌である。平家の人々はそれを聞いて皆思はず涙を流した。

いつまでかうしてゐても仕方がない。一日も早く勢を盛り返して都を取り戻せ、平家の人々はかう決心すると、行盛を大將として、五百餘艘の船に軍勢を載せ、中國に渡らせて先づ備前の藤戸の渡を占領した。

その頃、今の兒島半島は一の島になつてゐて、本土との間が藤戸の渡といふ海峡になつてゐた。中國を東から西に進むには、是非通らねばならぬ要害の地である。

源氏の方でも、早く平家を亡ぼさねば、又勢を盛り返されるので、頼

朝は範頼、義經に命じて征伐させることにした。義經は四國に向ひ、範頼は中國に進む手筈をきめたのである。

そこで範頼は三萬餘騎の大軍を率ゐて京都を出發し、九月の半過、藤戸の渡に着いた。源平兩軍は間四五町ばかりの海を距て、陣をとつたのである。

平家の陣からは小舟を乗り出し、扇をあけて、

「源氏の者共、こゝを渡せ、渡せ」

と呼ぶけれど、源氏の方には舟がなかつたから、さすが勇猛な東國武士も渡ることが出来ぬ。敵に招かれては腹が立つて仕方がない。

「わい、残念」

と思ふけれど、齒さしりして口惜しがるばかり、四五日は、空しく海の上

と、向ふの敵陣を眺めてくらしした。

源氏の方に佐々木三郎盛綱といふ武士がゐた、宇治川の先陣の四郎高綱の兄である。弟に負けてはならぬ、今度こそ自分も弟に劣らぬ功名をしたいものだと思へて来たのである。

「こゝは川と違つて海である。しかし、どこかに渡れる所がありさう

なものぢや、たかゞ四五町の渡ではないか。」

盛綱はかう思つたものだから、ある夜、たゞ一人そつと陣を脱け出で、水際に立つて考へてゐると、そこに一人の漁師がやつて来た。盛綱は喜んだ、

「おい、こゝから向の島まで、馬で渡ることの出来る浅瀬はないか、あつたらどうか教へてくれ、お禮はうんとする」

と言葉をかけながら刀を一本、その漁師にくれた。漁師はしばらく盛綱の



顔をぢろ／＼見てゐたが、お禮はうんとすると云はれたので、これはよいまうけ物だと思つたか、聞かれるまゝに盛綱に教へたのである。

「いかにも瀬は二つも御座います。月の初には東が浅瀬となり、月の終りには西が浅瀬となるんです。今は月の終りだから、西が浅瀬になつてゐる、浅瀬の幅は二十間も御座りませうか、その内、一とこだけが少し深いのです」

「さてこそ」と盛綱の心は躍るばかり、言葉もせはしくまたたづねた。

「それは有難い、だが、深いところと浅瀬とは、どうして見分けがつくか」

「そりや、浅瀬は浪の音が高いんです」

「御苦勞だが、ついでの事にぢや、わしを一つ案内してくれまいか」

「お安い御用、一体、これを知つてるのは私位なものなんですよ」と、漁師はお禮を澤山貰ひたいばかりに、先に立つて海に入り盛綱を案内してくれた。成程、一寸眺めただけではわからなかつたが、入つて見ると浅いものである。やつと膝位なところや、腰につく位のところがある。しばらく行くと、少しづゝだん／＼深くなつて、やつと背のたつ所に來た。漁師は立ち止つて、

「ここから先はまた浅くなります。しかし向岸には平家の軍勢がをりますから、もう歸らして下さい」

と云ふ、深い所は二十間位の間だけであつた。そこで二人はそつと音のたぬやうに注意しながら引き返したが、盛綱はふと思ひついたので、

「さて、これで浅瀬のあることはわかつたが、何分今は夜のことだし、

「広い海の中で、明日になつたら見當がつかなくなるとも限るまい。も一度、入つて印を立て、来てはくれまいか」と、言葉優しく頼みながら、今度は、直垂をやつた。漁師は喜んでそのとほりにしてくれた。

「かうしておけば、明日は先陣ぢや、敵も味方もさぞ驚くことぢやらう」

盛綱はうれしくて耐らない、天にも登るやうな心地であつた。そして人に知られぬやうに足音を忍ばせながら、味方の陣に歸らうとした。しかし、またふと思ひかへしたのである。

「だが、待て、賤しい者はよく人に饒舌るものぢや、この男がまた外の人に教へたら、自分の苦心も水の泡ぢや、氣の毒ぢやが、こりや

かうしておけぬ」

功名手柄を、立てたいばかりに、盛綱の心は鬼になつた。刀と直垂とを貰つていそ／＼と歸つてゆく男を後から小聲で呼びとめた。

「おい、一寸待つてくれ、もつと聞きたいことがある」

「何事か」と思つて、その男が小走りに戻つてくるのを、盛綱は抜く手も見せず、刀の鞘を拂つて、斬り殺したのである。流石に盛綱もしばらくはぢつとして、死骸を見つめてゐたが、

「氣の毒なことをした。ぢやが、これで先づ安心と云ふものぢや」  
血刀を拭つて鞘におさめ、靜かに陣屋に引かへした。

「明日こそは先陣の功名」

かう思うと氣の毒なことをしたといふ考もいつの間にか薄らいで、盛綱の



心は躍るばかり、眠もしないで夜の明けるのを待ちこがれたのであつた。

二 突

撃

やがて夜が明けた。源氏はとても渡れぬものと侮つてか、平家方からはまたも面白半分おもしろはんぶんに小舟を漕ぎ出し、扇をあけて源氏の兵を招いた。

「渡せ〜、渡れるものなら渡して見よ」

源氏の兵も癢には觸るが、とても渡れぬものとあきらめて、こちらからも、敵を招かうとすると、その時、源氏方から、緋緘の鎧よろひきて還ましげな馬に乗つた武者一騎、家來六騎を引き連れて、ざんぶと海に乗り入れ、浪を蹴散らして突進してゆく、云ふまでもなくそれは佐々木盛綱である。

源氏の大將範頼はそれを見て驚いた。

「危いつ、海を馬で渡るといふ法があるものか、佐々木は氣が狂つた

か、あれ早くひきとめよ」

と厳しく下知を傳へたから、土肥實平は、馬を岸に進めて大音あげ、

「大將軍の御命令ごめいれいちや、ひき返せ〜」と呼はるけれど、盛綱は耳にも聞き入れない。いよ〜馬を急がせて、浅い所は駆けながら、深いところは泳がせて、どん〜敵に向つてゆく。

源氏の兵も驚いたが、平家方はなほさら驚いた。とても渡れぬと思つたのに、遠慮會釋えんりよあしやくもなく敵は突進してくるのである。俄にあはて〜、弓をそろへ、

「あれ、射落せ」

と、雨の降るやうに矢を飛ばした。

しかし、盛綱主従七騎は少しも恐れぬ。兜を前に傾け鎧の袖をかざして進むのである。この有様を見て、源氏の兵は皆奮ひたつた。

「さては海は浅かつたのか、佐々木討たすな。續け、者共つ」

と、土肥實平、真先に馬を乗り入れ、千葉常胤、三浦義澄など、總勢五千餘騎、我後れじと馬を進ませ、浪を蹴立て、突進した。

盛綱は難なく海を渡り切つて、ひらりと岸に躍り上つた。

「我を誰かと思ふ、近江國の住人佐々木三郎盛綱なり。我と思はん者は、大將なりと侍なりと、いざ、來つて勝負せい」

と、高く呼ばりながら、主従七騎、刀を揮つて敵の中に突き入つた。平家方も七騎を中にとりこんで、一騎も餘すまいとかゝつてくる。そこへ、實平等の軍勢も海を渡り終へ、どつと叫んで突貫した。射る者、斬る者、兩

軍は、必死となつて戦つた。

盛綱の家來和比八郎は、平家方の勇士加部源次と引組んで、馬から落ち、上になり下になり一生懸命、ねじ合つたが、大力の源次は忽ち八郎を組み伏せて首をとつた。

かくと見て八郎の友達の小林三郎が飛んで來て源次とひつ組んだと思ふ間に、二人は組んだまゝ、ころ／＼と轉げて、ざんぶと海に落ちこんだ。それでも二人はとつ組んだ手を離さない、なほも水の底で組み合つた。

同じ盛綱の家來の黒田源太は、その時岸に立つて浮び上るのを待つてゐたが、しばらく上つて來ない。待ちきれなくなつたから、弓を入れて探つたところが、誰とも知らず、それにとりすがる者がある。引き上げて見ると、それは敵の源次であつた。

「わいつ、貴様は敵ぢやないか」

源太は、刀を抜くより早く、源次を斬つてすてた。そして三郎は難なく救ひあげられた。

こんな有様でしばらくの間、兩軍必死に戦つたが、やがて平家方は散々に破れて、皆船に飛び移つた。源氏方は勝つたけれど、船がないから追ふことが出来なかつた。

それにしても、四郎高綱は宇治川で先陣し、三郎盛綱は藤戸の渡で先陣した。兄弟ともに、これほどの功をたてたとは珍らしいとて、感心せぬものはなかつた。

鎌倉の頼朝も、これを聞くと非常に喜んで、

「昔から川を渡したことはあるが、海を馬で渡つたといふことは聞いたことのない。盛綱の振舞、まことに天晴ぢや」

と、わざ／＼自筆の感状を賜はり、又、後に兒島の土地を盛綱に與へた。盛綱はかうして名を轟かしたが、功名を立てたいばかりに、淺瀬を教へてくれた漁師を斬つたことを、情なく思つて、兒島の領地に寺を建て、厚くその漁師を弔つたのである。

さて、平家はまたも破れて中國を攻めとる望もかなはなくなつてしまつた。行盛始め敗軍の將士は、す／＼とまた屋島に歸つたのである。

### 三 扇 的 的

#### 一 逆 櫓

範頼が中國から九州に向つて進んでゐる間に、義経は屋島に據つた平家を亡ぼさうと、攝津の渡邊、福島の二個所に陣をとり、船を集めて四國に渡る用意をした。

しかし、東國武士は、馬上の戦では日本一であるが、船軍には不慣である、平家方には西國の船軍になれた者共が澤山従つてゐる。流石の源氏の勇士達も、なんとなく心に心配があつた。

そこで、軍の手段の相談をしたとき、梶原景時が一の謀を義経に申し

出たのである。

「今度の軍には、船に逆櫓を備へたがよからうと存ずる」

「逆櫓とはどんなものぢや」

「なんだかわからなかつたので義経は景時に尋ねたのである。すると景時は鼻をうごめかして、得意氣に答へた。

「さればで御座る。船軍といふものは、進むも退くも、自由には參らぬものぢやで、船にも櫓をしつけて敵が強ければ船をくるりと廻すまでもなく退けるやうにするので御座る。なんと名案で御座るまいか」

しかし、義経はそんなことは大厭な氣性である。一も二もなく反對した。

「縁起の悪いことを云ふぢやないか、軍のときは、大將が後に控へて、進め、進めと號令をかけても、とかく退きがちなものぢや。まして

始から、さやうな逃仕度をしておくことでは、敵に勝つなどは思ひもよらぬわい」

景時も中々の勇將であるが、石橋山の戦の時、頼朝を助けたことから、非常に頼朝の信用があるのをよいことにして、とかく高慢な振舞が多かつた。日頃から義經をも尊敬しないほど人を人とも思はぬ悪い癖があるので、折角名案だと思つた逆櫓を、義經からけなされてむつとした。

「進まねばならぬ時に進み、退く時に退いて、どこまでも敵を亡ぼす計略をするのが名將と申すもので御座らう。あなたのやうな向ふ見ずは猪武者といふもので御座る。お年が若いから左様なことを申されるのぢや」

義經は怒つた。

「猪武者でもなんでもよい。進み進んで敵を破るのが愉快なんぢや、

お前が大將軍になつたときに、千挺、萬挺の逆櫓をつけようとする

は勝手、義經の船にさような臆病な真似は眞平ぢや」

日頃から景時の高慢を片腹痛く思つてゐた人々は、これを聞くと皆心地よげに、目ひき袖ひき景時を笑つた。景時は眞赤になつて席を立つたが、そのまゝ、部下を引き連れ、範頼の後を追つて、義經とは別れてしまつたのである。この時の遺恨から、景時は後に義經を讒言するやうになるのである。

義經は人々に命令を下した。

「進んで死なうと思ふものはわしに従へ、退いて生きようと思ふものは、こゝから引き返へせ、遠慮はいらぬぞ」

人々は皆勇んで義經に従はうと誓つたのである。

そこで用意も整つたから、義經は命じて、船を出さうとした。ところが生憎、南風がひどく吹き出して進むことが出来ない。七八十艘も海岸にうち上げられてこはされた。暴風は二日二晩吹き荒れた。その間にこはれた船を修繕したが、なにしろ南の風が烈しく吹く間は、船を出すわけにいかぬのである。

すると三日目の夜なかなになつて、風は俄かに北風に變つた。その勢は前よりも烈しくて、小石を飛ばし、大木を吹き折るほどである。夜明方になつて少しは静つたやうである、だが、まだ船を出すことなどは思ひもよらぬほど、風も強く波も高かつた。

ところが、義經はその時俄かに出帆の命令を出したのである。

「風向はよくなつたぞ、早く船を出せ」

船頭共はそれを聞くと、驚き呆れてしばらくはものも云へなかつた。

「風向はいくらよくなつたとて、こんな大風なのに、どうして船など

出せるものですか、もう少し風が静まつてからでなくては……」

と、命が惜しいからいふことをきかない。義經は大いに怒つて厳しく命令を下した。

「向ひ風に出せといふんなら無理でもあらう。ちやが、風はこの通り

南ちや、何でいけないことがある。軍は不意をうつてこそ勝てるん

ぢや、一体、貴様達、海の上に出てから暴風にあつたらどうするつ

もりか、そのまゝちつとしてをるか、このよい機を外してなんとす

る。さあ、早く出せ、出さぬとあらば射殺させるぞ」

伊勢義盛、佐藤副信、弟忠信など、弓に矢を番へて駆けまはつた。ぐづぐづ云へばすぐにも切つて放つ勢である。これには船頭共も一層驚いた。

「船を出せば沈んでしまふ。出さねば射殺される。どうせ死ぬなら船を出して無茶苦茶に死んでしまへ。船頭らしくていゝだらう。さあ、

出せ〜」

と、今はもう死物狂、結へてある綱を切り、錠をまき上げて、荒れ狂ふ海の上に乗ら出した。流石に三萬餘騎の軍勢も、この恐ろしい有様を見ては恐れたのであらう。決死の覚悟でのり出したものは僅かに五艘である。一番は義經の船、二番は田代信綱の船、三番は後藤實基の船、四番は金子家忠の船、五番は淀の郷内忠利の船。

船には兵糧も積み、馬も積んだ、それで五艘の船に乗りこんだものは僅

かに百五十騎である。この小勢でもつて、何十倍の敵が籠つた本陣に押し寄せようといふのである。浪も風も恐ろしくはなかつたのであらう。義經の船にだけ篝火をたいて目印にし、外の船は皆そのあとに従つた。

風は吼へる。波は怒つて船ばたに碎け、船も人も一呑に呑みこまうとする。帆を高く張れば船は忽ちひつくり返へるから、ぐつと低く下げ、それも後にはすたぐに切り裂いて風を流さねばならなかつた。船頭共もかうなれば必死である。「い、い、い」と勇ましく聲かけながら、よろめく足を踏みしめ、梶をとり、水を汲み出す。かくて船は矢よりも早く大波小波を乗りこね、くゞり抜け、あたり前なら三日かゝるところを、たつた六時間足らずで乗り切つて、五艘の船は皆無事に、阿波の尼子の浦に着いたのである。

## 二 軍神の血祭

陸の上を見渡すと、海邊から四五町はなれた岡の上に赤旗が五六本、はたくと風に靡いてゐる。

義経は號令をかけた。

「平家の軍勢はこの浦を固めてゐる。みな仕度せい。馬は船に揺られて立すくんでゐるから、沖から海に入れ船と一しよに泳がせよ。馬の足が届くほどになったら船から鞍を置いて乗りうつるのちや」

百五十騎の兵は皆義経の命令に従ひ、やがてさつと陸上に駆け上つた。

「この浦の大將は何人ぢや、名乗れ」

と義経は呼ばつたが、敵陣からは何と思つたか答へるものがない。たゞ矢

を射かけるばかりである。

「さてはこのあたりの者共ぢや、取るに足らぬ敵とは思ふが、一々に首を切り取つて軍神の血祭にせい」

義経がかう下知を下すと、河越重房、堀親弘、熊井忠光、江田廣基、その弟 廣綱等三十餘騎、どつと叫んで突貫する。敵は阿波國の武士櫻間良連といふ者で三百餘騎を率ゐてゐたが、これを見ると、ばつと左右に分れた。三十餘騎の兵はとつて返して敵の中に割つて入り、當るを幸斬りまくれば、義経も續いて攻め寄せる。見る／＼四五十騎うち取られて、敵はばらばら逃げ出した。大將の良連も馬に鞭をあて、退くところを、源氏の兵は苦もなく追つて捕へた。勝関がどつと上る。見事な勝利である。

義経は虜になつた敵兵に向つて、この近くにまだ平家方の者がゐるかど



うかと尋ねると、三十町ばかり離れたところに、良連の甥の櫻間良遠といふ者が五十餘騎で陣を取つてゐるとのことである。

「さては小勢ぢや、恐れることはない、無二無三にうち破れ」

とばかり、忽ち押し寄せてときの聲をあげた。敵陣からもときの聲が上り、しきりに矢を射かけてくる。源氏の兵はそこらあたりの家をこはして堀を埋め、兜を前に傾けて、幕地に突進する。その烈しい勢に、敵は大將始め、先を争つて逃げ出した。ふみ止つたものも一々生捕にして首をはね、軍神の血祭にしたのである。

義経はそこらあたりの者に尋ねて見た。

「こゝは何と申す所ぢや」

「かつうらと申します」

「何つ、貴様はわしにへつらつてゐるな、軍に勝つたものぢやから左様なうそを申すのぢやらう。貴様のやうな者が一番油断がならぬ。

義盛つ、こいつを斬れつ」

伊勢義盛は「おう」と答へて前に出る、その男は眞蒼になつて云つた。

「いや、決してうそでは御座りません私共は呼び安いやうに、

實はかつらとはいつてゐますが、文字では勝浦と書きます。決して

うそでは御座りませぬ」

成程その様子ではうそを云つてゐるのではないやうだ。義経も機嫌が直つて人々に云つた。

「これを聞け、敵に向ふ義経が先づ勝浦に着いたとは目出度いでないか。敵は必ず亡ぼせるぞ」

人々もそれを聞いて皆勇み立つた。義経はそれから又尋ねて見た。

「ここから屋島まではどの位の道のりぢや」

「二日かゝります」

「それでは敵に知られぬうちに寄せねばならぬ。ぐづくしてゐるわけに参らぬぞ、さあ、急がう」

と、馬を早めて、少しも休むことなく急ぎに急いで屋島に向つたのである。

### 三 屋島へ、屋島へ

道を急いで進んでゆくと、向ふから一隊の兵がやつてくる。大將と思はれるものは黒い鎧をつけ黒い馬に跨がり部下百騎ばかり、旗も立てなければ、なんの印もない。義経はきつとそれを見て、

「源氏が平家かわからぬ者共ぢや、敵の謀かも知れぬ。義盛、行つて調べて来い」

「はつ」

と答へて、義盛は十五騎を引連れて出掛けて行つたが、一言二言何やら話したと思ふ間に、その隊の大將を連れて戻つた。

義経はその男に向つて尋ねた。

「お前は何者ぢや、源氏が平家か」

すると丁寧にお辭義して云ふやう、

「私は阿波國の住人白井近藤六親家と申す者で御座ります。源氏の大將軍が征伐に來られたと聞いてお味方にあがりました」

「それは感心なことぢや、案内役を申しつける。ぢやが、うそか、ま

ことか、はつきりせぬうちは、鎧を着てはならぬぞ。して、親家、屋島にはどの位の軍勢がをるんぢやな」

「平家は五千騎といひますが、所々方々に手分して軍勢を差向けてありまするから、屋島には澤山は残つてをりませぬ、多くて千騎位のもので御座りませう」

「ふむ、そして屋島からこつちに敵はをるか」

「はい、こゝから三十町ばかりの勝宮と申す所に、田口傳内左衛門尉成直が三千餘騎を率ゐて陣を取つてをりましたが、この間、伊豫の河野四郎通信を攻めに下つたので、あとに残つてゐるものはほんの僅かで御座ります」

これを聞くと義経は非常に喜んで、

「さらば急げ」

と、又も進軍し、勝宮に陣を取つてゐた敵兵を、何の苦もなく蹴散らして勝鬨をあげ、一休みもしないでなほも道を急いだ。

阿波と讃岐の境にある大坂越といふ山にかゝつたときには、もう夜半になつてゐた。しかし、味方は小勢なのだから、屋島の敵に知られぬ先に押し寄せて不意討にしなければならぬといふので、夜どほしかけて越わたのである。夜半すぎ、蹄の音高く馬を早めてゆくその前を、これも亦急ぎ足で歩いてゆく一人の男が居つた。手には手紙を挟んだ青竹をもつてゐる。何かわけがありさうだと思つたから、義経はすぐその男に追ひついて、言葉優しく尋ねてみた。

「お前は誰か、どこにゆくのか」

夜ではあるし、敵とは夢にも思はない。その男は平氣で答へた。

「私は都から屋島に参る使で御座います」

さてはと思つて、なほなほ、言葉を優しくして尋ねた。

「我々は阿波國の者で、平家の御味方として屋島に参るものぢや、お前は都から来たといへば定めし見てきたことぢやらう、九郎判官とやらいふ者が淀川口に船揃へして、今日明日にも屋島を攻めるといふ。軍勢はどの位あつたかね」

「そのことで御座います。淀川口には源氏の大軍が雲霞のやうに集つてをります。風さへ静まつたらすぐにも此方に寄せるで御座りませう。私は都のある御方から頼まれましたそのことを知らせに参るのです。あなた方も急いでおいでなさい」

義経は「してやつたり」と笑ひながら、

「おう、急いで参るとも、ぢやが、その九郎判官とはわしなんだぞ」といふより早く、いきなりその男を捕へて、道端の大木に縛りつけ、手紙を奪つて、松明の光で讀んでみると、

「九郎はすばやい男ですから、どんな大風、大浪も恐れず攻め寄せることと思ひます。よくよく御用心なさい」と書いてあつたのである。

大坂越はその夜のうちに通りすぎた。夜明方、麓でしばらく馬を休め、やがてほどなく牟禮といふ所に着いたのである。岡に登つて眺めると、屋島は狭い海を距て、呼べば應へるかと思はれるばかり、すぐ前に横つてゐる。義経は親家を呼んで聞いた。

「その海は馬で渡ることが出来るか、船がなければ駄目ではあるまいな」

「いね、あそこいらは深いことはありませぬ、干潮の時は馬の腹にも水はつきませぬ。そして今が干潮の盛ですから、渡るには、以てこの時で御座います」

それならば一刻も早く敵の氣がつかぬ先に攻め寄せようと、附近の人家に火をつけて勢を添へ、一散に岡を下ると、忽ち馬を海中に乗り入れて屋島に向つたのである。

#### 四 能登殿の矢先

折柄、屋島では、田口成直が伊豫に向つて河野通信を撃ち破り、首百六

十ばかりを使に持たせて屋島に送つてきたから、今、それを宗盛が見てる最中であつた

「火事ぢや、火事ぢや」

と兵卒共が騒ぐので、見ると、向岸の牟禮のあたりから盛んに火が起つてゐる。成直の父の成良は進み出て、

「晝間のことですから過ちの火事とは思はれませぬ。きつと敵が押し寄せたので御座りませう、敵は六萬餘騎と申す、圍まれたら一大事で御座るから、急いで船に移られたがよからうと存じます」

と云つた。そこで宗盛始め平家の人々は、成程と思つたから、様子を見定めることもしないで、慌て騒いで船に乗り、一町ばかりも沖に漕ぎ出たのである。

義経は、戦が上手である。七八十騎の部下を、集つて進んだならすぐ小勢だといふことが知られるので、七八騎位づつ、分れつゝに進んだのである。浪を蹴立て、突進すると飛沫は雪のやうである。白旗はその間に勇ましく翻へつた。沖の方から眺めた平家方は、この有様を見て、まさか、それほどの小勢とは思はない。目に餘る大軍とばかり心得て、しばらくは迎へ戦はうともしないのである。

義経は馬を渚に立て、高く呼ばつた。

「我こそは九郎判官 源 義経ぢや」

田代信綱、金子家忠、伊勢義盛、佐藤嗣信、その弟忠信、武藏坊辨慶など、我も我もと、義経に續いて名乗りをあげた。十倍の敵を見ても物の數とも思はぬ一騎當千の者共ばかりである。中にも後藤兵衛實基はものなれた古

兵であつたから、平家のすてゝいつた御所に火をつけると、忽ち黒煙がもうくと揚る。源氏の兵は勇氣益々盛んになつたのである。

そのうちに源氏の軍勢がどの位あるのかもわかつてきた。宗盛はあたりの人々に尋ねたのである。

「一体、源氏の軍勢はどの位あるか」

「まつたくの小勢で御座ります。たかゞ七八十騎位しかありません。宗盛も流石に残念で耐らなかつた。

「うむ、口惜しいことぢや、それほどの小勢とも知らないで、慌て船に乗り移り、折角の御所を焼かれたとは、何といふ残念なことぢや……」

おう、能登殿は居られぬか、陸に上つて一軍し給へ」

「畏りました」

と答へて能登守教経はすぐさま立ち上つた。そして五百餘人を引き連れて船を漕ぎ寄せたのである。

越中次郎兵衛盛嗣は、屋形船の屋根に躍り上つて高く叫んだ。

「さきほど名乗りをあげたやうだつたが、海上遠く離れてゐたこととてよくは聞きとれなかつた。一体、今日の源氏の大将軍はどなたなのぢや、名乗り給へ」

すると伊勢義盛が進み出た。

「しからばよつく承はれ、大将軍は清和天皇十代の後胤鎌倉殿の御弟九郎太夫判官殿ぢや」

と大音に呼ばれば、盛嗣は聞いてから／＼と笑ひ、

「あつはつは、さてはいつか鞍馬山の小僧になり、金商人の尻につい

て奥州くだりまで逃げていつた、あの小僧めだな」

と口汚なく罵つたので、義盛は眞赤になつて怒り、

「さういふお前達こそ越中栗殻峠の戦に負け、乞食しながら都に逃げ上つた者共でないか」

と罵りかへすと、盛嗣も負けてゐない。

「君の御恩をうけてゐる我々は乞食する必要もない、お前こそ伊勢の鈴鹿山で山賊しながら妻子を養つた者であらうが、」

又も罵るのである。金子家忠は聞き兼ねて、

「何を悪口するのぢや、東國武士の手並は去年一の谷で見せておいたはづ。あの男を射落してやれ」

と云へば、弟の親範が進み出て、弓を引き絞りひやうと射た。その矢は盛嗣の鎧の胸板に中り、もう少しで、裏に通るところであつた。これには盛嗣も驚いて、もう悪口も云はなくなつた。平家の船は渚に漕ぎ寄せて散々に源氏の兵を射る。源氏の兵も馬を左右に駈け立て駈け立て、敵を射た。やがて教経は

「どれ、九郎めを射て取らうか」

と、弓を持つて躍り出てきた。教経は平家方第一の猛將、その矢先に立つて生きてかへる者はないと云はれた人である。源氏の兵もそれを見て、「一大事」とうち驚き、皆、馬の頭を一面に並べて義経の馬前に立ち塞がつたのである。

「そこを退け、源氏の者共」

と教経は破れ鐘のやうな大音あげて、矢を取つては番へ、番へては放つた。見る間に鎧武者十騎ばかり、ばたくと射落され、或は痛手を負うて退いた。

中にも真先に立つた佐藤嗣信は、左の肩から右の脇腹にかけて射ぬかれ、真倒様に馬から落ちたのである。菊王丸といふ教経の家來が、その首を取らうと船から飛び下りて走つて來た。嗣信の弟の忠信は、それを見て矢を放つ。菊王丸は見事に射落された。そこで今度は忠信の家來が走り寄つてその首を取らうとした。教経は驚いて陸に飛び下り、右手で菊王丸をつかんで船の中に投げこんだのである。痛手を負うたことだから、一耐りもない、菊王丸はあつといふ間もなく息が絶ててしまつた。その有様に、流石の教経も、しばらくは物も云はない、たと涙を流すばかり、もう戦をする



元氣もなくなつた。

こちらでは、忠信が、兄を擔いで後に退つて來た。義經は急いで馬から下り、嗣信を膝の上に抱き上げて云つた。

「どうぢや三郎兵衛、義經ぢやぞ」

手を取つて慰めたが、嗣信は一言もなく、はらりと涙を流すのである。義經はその顔をぢつと見て、

「矢一つ中つたとて勇士が物も云へぬとはどうしたことぢや、今一度最

後の言葉を聞かしてくれよ」

と云ふと、嗣信は細く目を開きながら、

「故郷を出た時から一命は君に捧げたもの、君に代つて討死するのは常日頃からの本望で御座います。たゞ、平家を亡ぼして、君が世に

出られるのを見ることが出來ぬ、それがたゞ残念に思はれまする」

と、あねぎく、漸くのことと語り終ると、義經も泣かずにをれなかつた。

「平家を亡ぼすのも、もうしばらくぢや、世に出たならば、お前達兄

弟を左右に立てようと思つたのに、それも、空になつてしまつたか」

と、鎧の袖を顔に當て、さめくと泣けば、嗣信は、うれしげに、義經の顔を見上げながら、息を引き取つたのである。

「この上は厚く弔つてやる外はない」

と、牟禮の寺に送つて、丁寧坊さんに頼み、太夫黒といふ愛馬に立派な鞍をつけてその寺に納めた。この馬は義經が奥州を出るときに、馬は武士の寶だからと選み出して秀衡のくれたもので、宇治川でも鴨越でも、義

經が始終乗つてゐた馬である。忠信を始め人々は、義經のこの厚い志に感せぬ者はなかつた。

「この君のためには、露塵ほども命は惜しくない」  
皆、涙を流して云ひ合つたのである。

### 五 扇 的

そのうちに、阿波讃岐あたりの武士で、源氏に従はうと思つて今までこゝかしこに隠れてゐた者共が集まつてきたから、義經の兵は三百餘騎になつた。

間もなく日は漸く傾いて暮れようとする。今日の戦はこれきり、勝負は明日決しようとして、源平兩軍各々ひき退かうとした。そのとき、一艘の小舟

が、渚に向けて漕ぎ出てきた。見れば十八九ばかりの美しい女官が、緋の袴をはいて乗つてゐる。小舟の先に立てた竿には高く日の丸の扇が結びつけられてゐた。女官は手をあげて源氏の方をさし招いた。  
義經は不思議に思つたから、後藤實基を呼んで尋ねた。

「あれは何のつもりぢやらう」

「射よといふので御座らう。或は大將軍がよく見ようと思つて進み出る所を射落さうといふ謀かも知れませぬ。とも角も、弓の上  
手な者に射落させて御覽なさい」

ものなれた實基は、かう答へた。そこで義經はまた聞いた。

「あれを射、ことの出来るものが味方にゐるか」

「幾人もをりまするが、中にも下野國の住人那須與一宗高こそは小兵

ではあるが中々の上手で御座る」

「して、上手だといふ證據はあるか」

「さればで御座る、空飛ぶ鳥を狙つて三つに二つは必ず射落しまする」

「それならば大丈夫ぢや、興一を呼べ」

呼ばれて宗高は緋絨の鎧を着、兜を背に負うてしづくくと義經の前に進み出た。年十七、色白く、優しくも勇ましい武者振である。

「興一、御苦勞ぢやが、あの扇を射て敵に見物させてくれい」

義經はつくつくと宗高を眺めながら、かう命じた。宗高は、はつと頭を下げて答へた。

「私には難かしすぎるやうに存せられます、もし仕損じたならば永く源氏の疵となりませう。どうぞ外の人にお命じ下さい」

謙遜して、しきりに辭退したのである。しかし義經は聞き入れない。

「今度鎌倉を立つて西國に向つた者は、皆義經の下知に背いてはならぬのぢやぞ、さあ早くやれ、いやぢやとあれば今からすぐ鎌倉に歸るのぢや」

かう云はれては、従はぬわけにいかない。覺悟をきめた宗高は勇ましく答へた。

「しからば出来る出来る出来ぬはとも角、射て見ませう」

黒い逞ましい馬に跨がり弓とり直して、波打際に向つた。義經は頼もしげにその後姿を見送つた。

的は少し遠いから、宗高は馬を海の中に入り入れた。しかしそれでもまだ七八十間も離れてゐやうか、それに夕風が烈しく吹きつけて磯打つ波も

高かつた。船はゆらりとゆり上り、ゆり下り、扇はしばらくもちつとしてゐない、沖には平家の軍勢が船を並べて見物してゐる。陸には味方の人々が轡を並べ、片唾を呑んで控へてゐる、實に一生の晴の業であつた。射中すればこの上もない名譽であるが、射損ずれば末代までの恥なのである。宗高はもう死を決してゐた。

「南無八幡大菩薩、わけても本國の日光權現、宇都宮、那須湯泉の大  
明神、あの的、射落させ給へ、射損ずれば弓を折り自害して二度と  
人に顔を合せませぬ。願はくば今一度本國に歸させようと思召さ  
れるならば、この矢外させ給ふな」

と、静かに目を塞いで心の中に祈をこめ、やがて目を開けば、うれしや、風は少し収り、浪も静つてゐる。竿の先の扇も射よげにちつとしてゐる。

宗高は鎬矢を抜きとつて弓に番へた。きりりと引き絞つて、ひやうと射た。  
さあ、中つたか、中らぬか。小兵とは云ひながら弓は強かつた。鎬は屋  
島の浦に響きわたり、高く長鳴して目にもとまらず、扇は、ひらりと空  
中に十間ばかりも高く舞ひ上り、やがて春風に一もみ二もみ揉まれてさつ  
と海に浮んだ。矢は見事に扇の要のきは射切つたのである。

忽ち、沖では平家の軍勢が、舟ばたを叩いてはやし、陸では源氏の兵が  
箆をたいてどつと聲をあげた。敵も味方もしばしは我を忘れて喝采した  
のである。

するとあまりの面白さに、ちつとしてをれなかつたか、船の中から年五  
十ばかりの武士が白柄の長刀をふりまはし、扇を立てたところに立つ  
て舞をまつた。

さあ、射たものであらうか、射ないがよからうか、源氏の兵は、射よといふ者、射るのは可哀相だといふ者、しばらく迷つてゐたが、とうとう、射よといふことになつて、馬を引きかへして来た宗高にまた命令が下つた。ことはるわけにもいかない、宗高は又立ち戻り、今度は尖矢をとつて、ひやうと放てば、舞つてゐた武士は頸の骨を射られて倒様に海に落ちた。しかし、今度、はやし立てたのは源氏の兵だけであつた。流石に平家方はひつそりとして音もしない。

義経は宗高の功名をほめて名馬を與へた。

六 弓流し

平家方はいかにも残念で耐らない。忽ち、一艘の小舟が漕ぎ出されて、

中から三人の武者が渚に下りた。一人は楯をたて、一人は弓を持ち、一人は長刀を小脇にかいこんでゐる。そして口々に、

「源氏こゝに寄せよ」

と聲張りあげて呼ばつた。それを見て義経が、

「あれ蹴散らせつ」

と下知すれば、美尾屋十郎、同じく四郎、同じく藤七、丹生四郎、木曾中次の五騎、勢こんで突進する。楯のかげからは弓を持った敵が矢を番へてひやうと放つた。その矢は美尾屋十郎の馬に筈の隠れるほど深く突き刺つた。馬は屏風を倒すやうに倒れる。十郎はすばやく地上に立ち上り、太刀を抜いて敵を待ちかまへた。するとまた楯のかげから長刀を持った敵が躍り出て驀地にかゝつてくる。小太刀と長刀、とても叶はぬと思つたか、美

尾屋はくるりとまはつて逃げ戻る。敵はすかさず追つてくる。追ひついたらと見る間に、いきなり腕を伸ばして美尾屋の兜の鍔をむんづとつかんだ。「わい」とひく。ひかれじと踏ん張る。しばらくは互に「わい、わい」争つたが、腕の力も強い、頸の力も強い。鍔は忽ち、びりりとちぎれた。よるめく足を踏みしめて、やつと起き直ると美尾屋は一散に逃げのびた。敵は、もう追はうともしない。手に残つた鍔を長刀の尖に突きさし、高くあげて大音聲に呼はつた。

「源氏の者共よつく聞け、上總悪七兵衛景清とは我事なるぞ」と名乗りすて、からりと笑つて味方の楯のかけに退いた。

平家の軍勢は沖からこれを見て、始めて胸がせいしくした。

「景清討たすな、續け、續け」

と、二百人ばかり、船を漕ぎ寄せ漕ぎ寄せ、渚に上つて、楯を一面につき並べ、

「源氏、こゝに寄せよ」

と聲々に呼はつた。義経はこれを見て、どうしてちつとしてをれよう。八十餘騎を前後左右にそなへ、どつと叫んで突貫した。

平家方は大抵馬に乗らぬ徒歩武者である。東國武士の荒馬に駆け立てられ、蹴散られ、とうとう叶はなくなつて、船に飛び移つて、退くの外はなかつた。立て並べた楯は、ばたくと蹴倒された。

義経は勝に乗つて馬を海の中に入り入れ、隙間もなく攻め立てた。敵兵は熊手を兜に引つかけ引き寄せようとする。それを刀ではねのけ、戦つてゐるうちに、どうしたはづみか、小脇にかへてゐた弓を取り落した。

義経はうつむいたまゝ、襷でそれをかき寄せようとした。敵兵はこの時こそとばかり、争つて熊手をひつかけようとする。味方の兵はそれを見て手に冷汗を流した。

「お捨てなされ、お捨てなされ」

口々に叫んだけれど、義経は耳にもかけないで、流れてゆく弓を、やつとのことで拾ひとつて陸に上つた。

義経は笑つてゐたが、味方の人々は面白くない顔つきである。

「たとひどんなに貴い弓であるにせよ、どうしてお命に換へられませ

う、あんまり、はしたないでは御座りませぬか」

と眩くのを、義経は聞いて静かに語つた。

「いや〜、わしは弓を惜しんだのではないぞ、たゞ名が惜しいのぢ

や、叔父爲朝などの弓ならばわざと落してもやる、弱い弓を敵に取られて、これが源氏の大將軍義経の弓ぢやなご、笑はれたなら、

この上の恥はあるまい、命に換へても取らうとしたのはそのためぢや」

それを聞いて、始めて、そしつた人々も、今更に感じた。成程、まことの名將ぢやと、舌を巻いて感心せずになかなかつたのである。

### 七運のつき

やがて日はとつぷりと暮れてしまつた。平家の船は沖に漂ひ、源氏の兵は牟禮に歸つた。一昨日は、攝津の渡邊を出て大風大浪にゆられて一睡もしない、昨日、阿波の勝浦についてからは、敵を討ち破りながら進軍して、

夜ごほし中山を越え、今日もまた一日戦ひくらししたのである。流石に源氏の軍勢は、人も馬もすつかり疲れはて、もう死んだものゝやうに眠りつぶれてしまつた。しかし、眠らぬ者がたゞ二人ある。高い所に義経が立つてゐた。低くくぼんでゐる所に伊勢義盛が隠れてゐた。義経は敵を見張り、義盛は敵がもし寄せたならば、馬の太腹射ぬいてやらうと待ち構へてゐたのである。

この夜、平家方では、夜討の相談があつた。能登守教経を大將として出かけるばかりになつたのであるが、江見盛方といふ者と、盛嗣とが、われこそ先手になると云ひ争つて、どちらともきまらぬうちに夜が明けたものだから、折角の夜討の計略もだめになつてしまつた。この時、寄せたならば勝つたものを、平家としてはまことに惜しいことであつた。

翌日、平家の船は志度の浦に退いた。義経は八十騎を率ゐて追ひかけた。平家は敵が小勢なのを見て、中に取り圍んでみな殺しにせよと、千餘人ばかり岸に上つたのである。ところが、牟禮に残つてゐた源氏の兵二百騎が砂塵をあげて突進して来たのを見ると、

「やつ、源氏の大軍が押し寄せたぞ、取りこめられては一大事ぢや」と、臆病神にとりつかれたときは仕方のないものである。我勝にと、船に飛び乗り、とうとう遠く九州の方に漕ぎ去つてしまつたのである。



#### 四、壇の浦の海戦

##### 一 先陣争

驕る平家の滅びる時が来た。屋島を落され。九州を追はれて、平家は船を長門の壇の浦に浮べ、こゝを最後の戦場としなければならなくなつた。義経は平家を追うて、壇の浦から三十町ばかり東に離れてゐる奥津といふところに来た。屋島の戦に間に合はなかつた源氏の兵も、おひく後からやつて来て船の数は三千ばかり。この一戦に平家を滅さうものと、大將始め一同盛んな意氣込であつた。

海戦は三月二十四日の朝六時頃に始まることになつてゐた。

さて、逆鱗のことで恥を搔いた梶原景時も、この時、また義経の軍に加はつてゐたが、戦の相談が始ると、進み出て義経に云つた。

「今日の先陣は何卒この景時に命じていたゞきたう御座る」

景時は屋島の戦に出なかつたことを非常に残念に思つてゐたので、今度こそ功を立て、前の恥を雪ぎたいものだと思へてかう願つたのである。

ところが義経は相不變、自分から先頭に立つて戦ひ、家來任せにはしたくないと思つてゐたので、景時の願をさきいれない。

「いや、義経がゐなければともかく、をる以上、先陣を譲るわけには参らぬぞ」

「でも、あなたは大將軍で御座る。先陣は是非、景時に許していただゞきたい」

「それは思ひもよらぬことぢや、大將軍は頼朝公お一人、義經はたゞその軍奉行ぢや、お前達と同じ事よ」

と、きゝ入れる色もないので、景時も腹の虫を押へかね、憎々しげにつぶやいた。

「ふむ、あなたはとても侍の主にはならぬ方ぢやわい」

かねくから景時の高慢なのを憎んでゐた義經は、これを聞くと眞赤になつて怒つた。

「何を云ふつ、貴様は日本一の馬鹿者ぢや」

と、刀の柄に手をかけて怒鳴つたから、

「おう、これは面白い。わしの主人は頼朝公お一人ぢや、斬れるものならお斬りなされ」

と、景時も刀をとつてつめ寄つた。景時の子景季、景高、景茂など、また皆刀をさげて、父のあとについて進んだ。

「無禮者つ、」

義經の家來の伊勢義盛、佐藤忠信、武藏坊辨慶なご一騎當千の者共は、口口にかう叫んで、起ち上り、景時父子を中に取りかこんで、斬つて棄てようとする。

驚いたのは、そこに居合せた諸將である。三浦義澄はすぐさま立つて、義經を抱きとめた。土肥實平は景時の手を抑へてひき戻した。

「これは何事で御座る。大敵を前に控へて同志討するなどは、平家に聞けても面目ない、頼朝公にも恐れ多い次第では御座らぬか、お控へなされ、静まりなされ」

と、人々は必死になつて兩方をなだめ、やつと其の場はおさまつた。しかし、おさまらぬのは景時の胸の中である。逆艦のこと、云ひ、今度のこと、云ひ、二度までもこんなことがあつたものだから、いよ／＼義經を怨み、とう／＼、あとで頼朝に讒言するやうになつたのである。

二 死 物 狂

最後の決戦を試みる時がいよ／＼來た。源平兩軍は波の音をもうち消すやうな関の聲をどつとあげた。

平家方の勇將知盛は、その時、船の先に突つ立つて大音に下知を傳へた。

「軍は今日が最後ぢやぞ、死んで名を殘せ、生きて恥を見るな、東國の者共に笑はれぬやうにせい」

これを聞くと平家方の將士は皆勇み立つた。

中にも悪七兵衛景清が進み出て、

「東國武士は馬の上でこそよく戦ふが、船軍には慣れてゐぬ、魚が木に登るやうなものぢや、一々海に蹴落してくれう」

と云へば、越中次郎兵衛盛嗣も、

「どうせ組むなら大將の九郎めに組め、九郎は心こそ猛しいが、丈は低く力も弱い。あいつ小脇に挟んで海に入れてやれ」

と云ふ。源氏の船は三千餘艘、平家の船は一千餘艘、平家は船の數こそ少いが、船軍には慣れてゐる。今日こそ、面憎い源氏の者共に、目に物見せてくれうとばかり、勇士達の意氣は天をも衝かんばかりである。

この有様を見て知盛は非常に喜んだ。そして宗盛の前に出て云つた。

「味方の兵は、今日素張らしい元氣で御座います。たゞ成良ばかりが疑はしい、何となく心替した様子に見えます。あれの首をはねて人々を勵まさうでは御座いませんか」

知盛は早くも阿波の武士田口成良が背かうとする心を見抜いたのである。ところが宗盛にはわからない。

「いや、長年の間よく仕へてくれた者を、たゞ疑はしいといふだけで首をはねるのは宜しくない。ともかく、しらべてからのことぢや」

と云つて成良を呼んだ。

「どうした、成良、いつものやうにも見えないぞ、臆したか。よく戦へと四國の者共に云ひ傳へよ」

「さては」と成良はぎよつとしたが、何喰はぬ顔で、

「なんで臆しませうぞ」

と答へたまゝ、長居をしてはいけなと思つて、すぐさま宗盛の前を下つた。

その間、知盛は、柄も砕けよとばかりぐつと握り、唯一刀に斬つてすてようと、二度三度、宗盛に目配せしたが、宗盛は知らぬ顔してとう／＼それを許さなかつたのである。

やがて戦は始まつた。平家は備を三段に立て、進んだ。山鹿秀遠は五百餘艘を率ゐて先陣となり、松浦黨の三百餘艘、平家の一族の乗組んでゐる二百餘艘がそのあとに續いた。

中にも秀遠は九州一の強弓と云はれた人である。部下の中からわりすぐ

つた兵五百人を先頭に立て、一齊に矢を放つた。源氏の兵はばたくと射倒される。それを見て勇み立つた平家方は、船を上手に漕ぎ廻はし、源氏方のたぢろく隙を狙つて烈しく攻め立てた。

一体、壇の浦のあたりは、瀬戸内海から、外海に通ふ狭い海峡になつてゐて、満潮の時は、内海から外海に、干潮の時は外海から内海に、潮が矢よりも疾いと思はれるほどの勢で流れる所になつてゐる。戦の始まつた頃は、丁度、潮が、西から東へ流れこんでゐる時であつた。それで平家の船は潮に乗つて進むが、源氏の船は潮に逆らはねばならない、ともすれば押し流されるやうになるのである。東國武士は馬に乗つてならば鬼とも組んで恐れぬ者共ばかりであるが、船は思ふやうにならぬ。そこにつけこんで、船軍に慣れた平家方が、今度こそといふ意氣込で進むのだから、だんく

うち破られて、顔を向けることも出来ぬほど矢を射かけられたのである。義経はそれを見て真先に進み、味方を勵まし、烈しく戦つた。それに源氏の船は多い、兵は勇敢である。容易に勝敗がきまりさうに見えなかつた。

三 遠

矢

源氏方の和田義盛はわざと船に乗らなかつた。馬に跨つたまゝ海邊を走りまはり、平家の船を目がけては散々に射た。弓は強い、腕前は確かである。三町よりも近くにゐる者は、一人も外さず射て取るほどの勢である、義盛も流石に得意であつた。中にも遠く飛んで、知盛の船に突つ立つた矢を、

「その矢、返していただきたい」と扇をあげて招きながら大音に呼はつた。ときの聲、波の音にまぎれて聲は聞えないが、その身振りで、義盛の考はわかる。そこで知盛はその矢を抜かせて見た。十三束三伏の矢で、和田小太郎義盛といふ字が漆で書いてある。

「たれかこれを射て返してやれ」

知盛はかう命じたが、われ射て見ようといふ者もしばらくない。やがて伊勢國の住人新井親清といふ者が進み出て、

「それならば私が射て見ませう」

とその矢を取つて射返へした。矢はひゆうと飛んで義盛のあるところを通り越しはるか後に控へてゐた三浦太郎の左腕にはつしと立つたのである。

三浦の人々は皆口々に呟いた。

「小太郎が、自分ほどの者がないと自惚て恥を掻いた。可笑しいぢやないか」

かう嘲る聲が聞けたから義盛はちつとしてをれなくなつた。恥しくもあれば、腹も立つ。そこで今度は小舟に乗つて漕ぎ出し、見當り次第に、矢を取つては放ち、放つては番へた。見る／＼射倒される者は何十人と數へることが出来ぬ。目覺ましい働である。

さうするうちに、敵の方から一本の矢が飛んで来て義經の船に中つた。敵は義盛がしたやうに、こつちに向ひ

「その矢をくれ、その矢をくれ」

と呼び立てた。義經がそれを抜かせて見ると、十四束の長さで伊勢國住人

新井紀四郎親清と書いてある。

義経は後藤實基を呼んで尋ねた。

「たれかこの矢を射返へす者が味方にをるか」

「甲斐源氏の浅利與一殿なら大丈夫と思はれます」

「さうか、それならすぐ與一を呼べ」

そこで浅利與一義遠が、この矢を射返せといひつけられることになつた。

矢を受け取つて長さをはかつてゐたが、

「これは長さも短かいし、少し弱いやうでもありますから、私の矢で

射ませう」

と云つて、十五束二つ伏の矢を取り出し、ひやうと放つた。その矢は四町

あまりのところを飛んで、船の舳に立つてゐた親清に中つた。親清は眞倒

様に船底に轉げ落らた。

これから後は遠矢を射る者もない。源平兩軍は、こゝを先途と必死にな

つて戦つたのである。

#### 四海の底へ

勝敗は中々さまならない。平家方は烈しく攻め立てるけれど、源氏もさるもの、よく防いで破られぬのである。

その時、何千といふ澤山な海豚が、列をつくつて沖の方から平家の船に向つて泳いで來た。あまり珍らしいことなので、何かのしらせではないかと思つたから、宗盛は安倍晴信といふ人を寄んで占はせた。

晴信はしばらく首を傾けて考へてゐたが、

「この海豚がくるりとむきを変へたなら、源氏の負となるでせう。そのまゝ進んでくるやうなら味方が危ないやうで御座います」と答へも終らぬうちに、海豚の群はさつ／＼と平家の船の下を通り過ぎていつた。

「さては味方の負けか」

宗盛は顔色を変へて、がっかりせずにをれなかつた。

そのうちに潮の流の方向が、今度は東から西に變り出したのである。今までは平家方は潮の流に乗つて、船軍に不慣な源氏方を苦めたのである。ところが、今度は、味方の方が潮に逆はねばならぬ。それに源氏方もだんだん勢を盛り返してくるのである。

長年仕へて来た平家の運命も長いことはないと思きりをつけて早くから

心替してゐたあの田口成良は、この時まで、源氏につくをりを待つてゐたが、今、源氏方の勢がだん／＼よくなつて来たのを見て、急に三百艘の兵船を従へて義經に降参したのである。あの時に斬りすてたならと、今更後悔してもおつ／＼かない、平家がつかりするにひきかへて、源氏はいよいよ元氣になつた。

一体、平家方には普通の兵船の外に、唐船といふ大きな船を持つてゐたが、わざと天皇を始め主だつた大將達は兵船に乗り、唐船には勇士を乗せてをいたのである。これは、源氏が主だつた人々の船かと思つて唐船を攻めるとき、ひどく惱ましてやらうといふ計略であつた。

ところが、成良が降参すると、この計略を義經に知らせたものだから、源氏はだまされることなく、主だつた人々の乗つてをる兵船を捜し出して



烈しく攻めつけたのである。

潮の流はだん／＼早くなつた。平家の船はともすると押し流される。そこへつけこんで、源氏は船をのりつけ、敵船に飛び移つて、散々に斬りまはるのである。船頭共は皆、怖れて船底に隠れ、船を漕ぐ者もなくなつた。陸に寄りつかうとすると、陸の上にも源氏の軍勢が待ち構へてゐて、矢を射てよこす。見る／＼、平家の船は列を亂して散々な有様になつた。兵士も船頭も皆斬り伏せられて、赤旗ばかりたつてゐる空船が、あちらにも、こちらにも漂つてゐる。元氣ばかりは盛んでも、平家の勇士も今はなんともすることが出来なくなつた。

知盛は小舟に乗り移り、大急ぎで天皇の御座船にまゐつた。女官達が、右からも左からも集つて来て、勝負はどうなつたかと尋ねる。

「今に珍らしい東國武者を御覧なさることが出来るでせう」  
知盛は、たゞかういつてから／＼と笑つた。

「それほどまでになつたのに、御冗談でもありませんまい」  
と、かねて覺悟はないでもなかつたが、流石に女のことゝて、恐れてゐた最後の時がいよ／＼來たのかと思ふと耐らなくなつて、女官達は聲をあげて泣くのであつた。

「さあ、もう覺悟をなさい。見苦しい物は、皆、海に入れて掃除するやうに」

と云ひながら、知盛は自分から先に立つて、船の中を掃除し出した。

「今になつて卑怯な真似はしたくない。潔く亡びるだけだ」  
これが知盛の心であつた。

二位尼といふ人がゐた。今はなくなつた清盛の妻である。流石に日頃から覺悟してゐたことゝて外の人やうに驚いたり慌てたりはしない。この時、安徳天皇を抱き上げ奉り、しづ／＼と舳に歩み出たのである。

天皇は御年八歳、あたりも輝くばかりの御美しさである。不思議さうに二位尼の顔を御覽になつてお尋ねになつた。

「尼よ、どこにゆくつもりなの」

二位尼は、はら／＼と涙を流して

「御運も盡きはてました。この國にはもうおいでになるところも御座いません。あの波の下に極樂淨土とて立派な都が御座います、そこにお伴致しませう……」

さあ、伊勢大神宮にお暇を申し上げなさいませ」

お答へすれば、天皇は少しも騒がせられず、東に向つて小さな御手を合せられたのである。敵はだん／＼御船に近づいて來た。尼は天皇を抱き上げ奉つたまゝ、さんぶと海に躍りいつた。いたはしや、御姿はそれなりお見えにならない、畏れ多くも海の底の都へと入らせられたのである。

一体、平家が安徳天皇を奉じてゐるため、鎌倉にゐる頼朝も、天皇の御身に、もしものことがあらせられては畏れ多いことであると、非常に心配して、範頼や義経にも、何べんとなく、くり返し／＼、御無事でお歸りの出来るやう取計らひ申せと、いひつけてあつたのであるが、とう／＼、かういふ勿体ないことになつてしまつた。嘆いても餘りあることである。

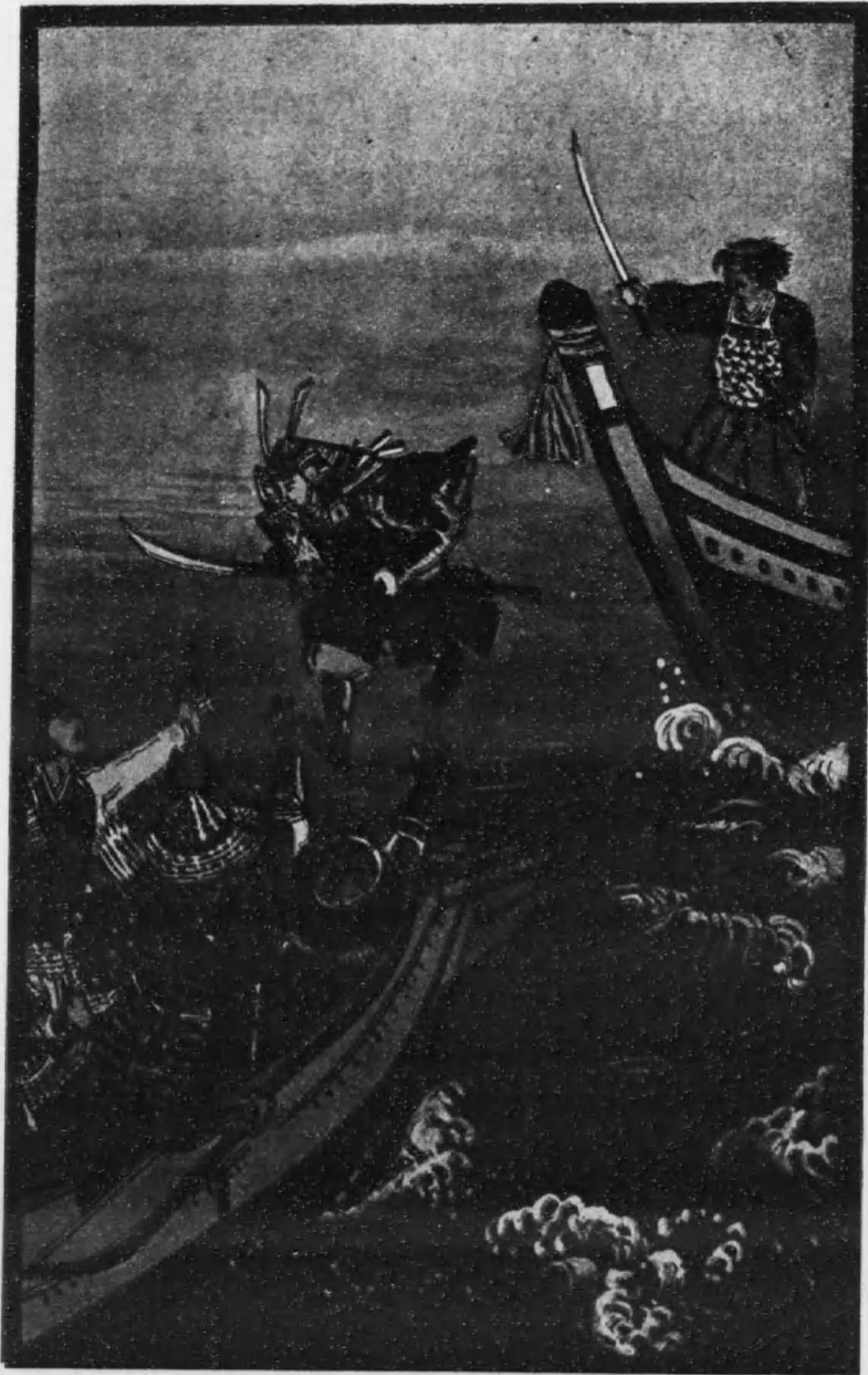
かうして天皇は海の底にお入りになつた。平家の諸將も皆深く討死と覺悟をきめたのである。

有盛、行盛の兄弟は同じ船に乗つて、兜を脱ぎ鎧の袖をひきちぎつて身  
軽になり、最後の奮闘を續けてゐた。敵の船は四方から迫つてくる。有盛  
は舷に立つて散々に敵を射た。行盛は舳に坐つて静かにお經を讀み、讀  
み終ると弓をとつて戦つた。源氏方の勇士、熊井忠之、江田廣基等、小舟  
に乗つて近づき、忽ち行盛等の船に飛び移つた。行盛、有盛の二人は弓を  
すて、刀を抜き、思ふ存分戦つたがとう／＼力盡きて討ち取られた。

教盛、經盛の兄弟は手に手を取り組み、鎧の上に錨を背負つて海に沈ん  
だ。

中にも、平家方第一の猛將能登守教經の最期は見るも勇ましい限りであ  
つた。

教經は始めから今日を最後と覺悟をさめて、一段と目覺ましい働振り



であつたのである。始めは弓をとつて散々に敵を惱ましてゐたが、矢がな  
くなると長刀を揮つて立ち向つた。船を漕ぎ廻し、近寄る敵を誰彼の  
容赦なく、當るを幸、薙ぎ倒したものだから、敵も恐れて教經を見ると、  
よけたほどである。

知盛はその有様を勇ましげに眺めてゐたが、やがて教經に言葉をかけた。

「あまり罪作りなことはなさらぬがよい。その者共は皆雑兵共のやう

ちや」

それを聞くと教經は、

「さては義經に組めといふ意味か、それは自分も望むところちや」と  
心になづいた。それから船を四方八方に漕ぎ廻して、たゞ義經を捜  
しまはつた。

しばらくして、はたと義經の船に出會つた。教經は喜んで、兜を脱ぎずて鎧の袖をひきちぎり髪を亂したまひ、ひらりと義經の船に躍り入つた。義經のそばに控へてゐた者共は、主人の一大事と争ひ起つて教經に組みついてくる。それを教經は、右左に蹴倒し、振り飛ばし、たゞ義經を目がけて躍りかゝつた。義經も叶はぬと思つたか、長刀を小脇にかゝへて、ひらりと隣の船に飛び移つた。その間は二丈程もあらうか、まるで鳥のやうな早業である。

教經は追はうとしたが、とてもその真似は出来ない。今はこれまでだ。そこで聲を張りあげて呼はつたのである。

「我と思はん者は教經に組んで生捕にせい、鎌倉に下つて頼朝に一言云ふことがあるつ」

大手をひろげて、あたりを睨みまはしたが、しばらくは組みつくものもない。するとこゝに土佐國の者で安藝實光といふ大方の勇士がをつた。

「能登殿いかに強くとも我等三人が一しよに組めば百人力、なんで負けることがあらう。さあ、かゝれ」

と弟の次郎と一人の家來をつれて、教經の船に飛び乗つた。それを見ると教經は、いきなり真先に進んだ家來の方を海に蹴飛ばし、次に進む二人の兄弟を兩脇に挟んでぐつと締め、

「貴様達、死出の山路のお伴するんだぞ」

といひながら、さんぶり海に躍りこんで死んだのである。年はまだ二十六であつた。

こんな有様で諸將は續々と討死するが、總大將の宗盛父子は死なうとし

ない。舷に立つて、きよろ／＼あたりを見廻してゐるだけである。生捕になつたらこの上の恥はないのである。そこで、はたにゐる家來達が、齒がゆくて耐らなかつた。とう／＼耐りかねて、そばを通りすぎるふりをしながら、いきなり宗盛を海の中に突き落した。

宗盛の子の清宗はそれを見るとすぐ自分も飛びこんだ。ところが生憎、二人とも泳ぎが上手であつた。父は子が沈んだなら自分も沈まうと思ひ、子は父が沈んだら自分も沈まうと思ひながら、お互に顔を見合せて沈まうとしない。しきりに泳ぎまはつてゐる。

この有様を見て、伊勢義盛が小舟を漕ぎ寄せ、先づ清宗に熊手をひつかけて引き上げた。すると宗盛はもう沈むつもりがない。わざと泳いで義盛に近づいた。そこで義盛は苦もなく宗盛をも引上げることが出来た。

すると宗盛の家來の飛驒景經といふ者が、大いに怒つて義盛の舟に飛びこんで来た。

「御主人を捕へたのは何者ぢやつ」

と怒鳴りながら大刀を揮つて義盛に躍りかゝる。義盛の家來が、その中に入つて防いだ。景經はさつとその兜を打ち落して、返す刀に首を切り落した。その勢で義盛に斬りつける。それと見て、隣の船から堀親弘といふ者が、矢を放つて景經の中で、弱るところをその舟に乗り移つて組みつき、多くの家來達と力を合せてとう／＼討ち取つてしまつた。

目の前に自分の家來が討たれてゐるのを見ながら、宗盛はたゞ自分の命と我が子の命が助かつたのを喜んでゐる様子であつた。その不甲斐ない有様は憎らしいやうである。

宗盛のことが氣にかゝつて、この時まで死なずにゐた知盛は、今、宗盛父子が生捕になつたことを聞くと、あまりの残念さにしばらくは言葉も出なかつた。やがてのこと、きつと心をと直し、鎧を二つ重ねて着て、家来の伊賀平内左衛門と手を取り組んで海に入つた。それを見て廿餘人の家來は我もくゝとその後を追つて沈んだ。

かうして、平家の一門は、僅かの人々を除いた外は皆、花々しく壇の浦の藻屑と消れたのである。はかなくも又美しい最後であつた。

矢叫びの音もやんだ。源氏の兵がどつと勝鬨をあげた後は、海の上に赤旗や主のない船がゆらくと波に漂ふばかり、波の音がひとり高かつた。

## 五 九郎判官の最後

### 一 兄との仲違ひ

鹿も四足、馬も四足、鹿の通れるところは馬にも通れると叫んで鴨越の險阻を下つた義經、大風大敵を物ともせず屋島の敵を攻めた義經、壇の浦の一戦に見事平家を亡した義經、昔から名將勇士と叫ばれた人も數多い中に、義經ほどの英雄は多くはない。なんと云つても義經は日本男子の花であつた。しかしこれからその義經の悲しい最期を語らねばならぬのである。

義經の兄頼朝もわらい人であつたが惜しいことに、疑深い性質で、義經

があまり目覺ましい働をしたものだから、始の中こそ喜んでゐたけれど、だん／＼心の中で恐れるやうになつたのである。そこにつけてこんで屋島の戦の時の逆櫓のことや壇の浦での先陣争などから義経を憎んだ梶原景時が、あることないこと頼朝に讒言したので、頼朝は、平家を亡して凱旋した義経を鎌倉にも入れずに追ひ返したのである。

義経は我が身の悲しい運命を嘆きながら、京都に歸つた。頼朝はとうとう、土佐坊昌俊といふ者をやつて義経を討たうとした。

そこで義経も、むざ／＼討たれるのは残念だから、夜討に來た昌俊を苦もなく捕へて、斬つた。かうして兄と敵同志になつてしまつたのである。

二 吉野山

土佐坊昌俊が斬られたことを聞くと、頼朝は眞赤になつて怒つた。そこで自分が大將になつて大軍を引連れ、京都に攻め上ることになつた。

義経は兄と戦ひたくない、また都を騒がしても恐れ多いことだと考へたから、後白河法皇にお暇を申し上げ、三百騎を率ゐて九州に遁れることゝなつた。義経は平家や木曾義仲の後をうけて、これまで都を鎮めてゐたが、よく人民を愛して下々の者を憐れんだから、さしも功をたてたのに、御褒美を貰ふどころでなく、讒言にあつて兄に逐はれることになつたのを、人は皆、氣の毒に思つた。それで今度、都を出て九州に下るときも、人々は涙を流して見送つたのであつた。

都を出て攝津の國にくると、多田行綱といふ者が千餘騎の兵で義経を防いだ。しかし義経は物ともしない、一蹴りに蹴散らして、大物浦に着いた。



そこから船に乗つて九州に向つた。

しかし、運の悪いときは仕方がない、しばらくゆくと、俄に暴風が起つて、船は檣を折られ、梶を碎かれ、義經の乗つた船は、もとの攝津に吹戻されてしまつた。三百餘騎の兵も、ちりくばらくである。もう九州に下ることも駄目になつてしまつた。

そこでもうかうなつては仕方がない。義經は僅かの家來を連れただけで、人目を忍びながら大和の吉野山に隠れたのである。

時は冬の初め、花の吉野も今は雪の吉野である。山も峰も見渡す限り白雪に埋もれて、道もよくわからなかつた。しかし、頼朝の威光が國々に行きわたつてしまつたのだから、義經にとつては、日本國中、皆、敵の國になつたやうなものである。鶺鴒の險阻を越ね、大風大浪を物ともせず、屋

島の敵を追ひ落した勇將も、今は情ない落人の身である、草にも木にも心を配り、雪踏む足をもそつと運んで人の目を隠れねばならぬのである。滑つたり轉んだり、この冬の寒空を汗に濡れながら、山奥山奥へと道を急いだ。

しばらくは人目につかぬ所に忍んでゐたが、そこもとうとう安全なところではなくなつた。いつしか、義經主従が吉野山に隠れてゐるといふことが知れたからである。

吉野山には大きなお寺がある。その頃、大きな寺にはどこにも澤山の法師武者が居つたが、この山にも矢張り吉野法師と云はれてゐる強い法師武者が澤山居つたのである。義經主従が隠れてゐるといふことを聞き知ると、法師達は集つて相議をした。年とつた坊さん達は、餘計な事をしないで捨

てておけといふが、血氣盛んな若い法師達は、どうしても承知しない。

「この前、奈良の法師が以仁王のお味方をしたので、清盛入道に寺を焼かれたことがある。我々がこのまゝ、義經を見遁がしたなら、きつと鎌倉からひどい目にあはされるだらう、打ち捨てゝはおけない、それよりも早く討ち取つて御褒美を貰つた方がましだ」と、常日頃、何か事あれかしと待ち構へてゐる者共だから、とうとう老僧達を説き伏せてしまつた。

「さあ、かうなつては一時も早く押し寄せねばならぬ、人々を驅り集めやう」

と、鐘撞堂に登つて大鐘をついた。忽ち、鐘の音は殷々と山々谷々に響き渡つたのである。

折柄、義經主従は中院谷といふところに隠れてゐた。餘程、離れてゐるが、それでも鐘の音は遠くこゝまで響いて來たのである。

疲れ切つた身を雪の上に横へて、眠るともなく、とろくと眠つてゐた義經は、それを聞くと、矢庭に、がばとはね起きた。

「はて怪しいぞ、時でもないに鐘の音がする、定めし、法師共が鎌倉へ忠義立するのであらう」

家來達も皆はね起きた。耳をたてゝしばらく鐘の音を聞いてゐたが、

「おう、成程これは唯事でありませう。敵が寄せたら、この場を落ちませうか、

戦ひませうか、それとも腹を切りませうか、今から覺悟をきめておかねばなりませんまい」

と云つたのは備前平四郎といふ者である。伊勢義盛もそれに續いて

「それは尤ぢやが、むざ／＼腹を切るのも無益のこと、さりとて法師共と戦つて討死するも残念で御座る、この場は一先づ落ち延びようでは御座らぬか」

と云ふと、人々は皆それに賛成した。

しかし、一人、武藏坊辨慶だけは

「寺のある山に鐘の音のするはあたり前ぢや、鐘が響くからとて敵が寄せると心得たら、どの山にも敵が居ることになり申すわい。しばらくこゝに待たつしやい、一走り行つて様子を見て參らう」

と云ふなり、一散に走り出て、はるかに麓の方を眺めると、法師武者達は皆鎧兜に身を固め、手に／＼弓や長刀を持つて、こちらの方に登つてく

る有様である。

「さては事ぢや」

辨慶は飛ぶやうに駆け戻つて義經に云つた。

「仰せの通り、間違ひもなく敵が寄せてくるので御座ります」

「して、敵は何者ぢや、東國武士か、それとも吉野法師か」

「はい、この山の法師共で御座ります」

早口にかう答へると義經も驚いた。

「それはいけない。東國武士ならとも角、この山の様子に委しい者共が寄せるのでは油断がならぬ。早く落ち延びねばならぬぞ、誰かこの中に案内を知つて居るものがあるか」

辨慶は即座に答へた。

「はつ、大体は私が存じてをります。麓の方は敵ぢやから駄目として、西は深い谷、北も龍返しと呼ぶ難所で御座る、たゞ東の方に行くより道はありませぬ」

そして自分が先立になつて進まうとした。

この時、佐藤忠信が進み出て、義経の前に手をつかへ、言葉強く申し述べた。

「君は何卒、御安泰に落ちさせられい。忠信はこゝに踏み止つて防矢射らうと存じまする」

決心の色はその顔にあらはれてゐる。人々は思はず忠信を見つめた。

### 三 佐藤忠信

だが、義経は情深い大將である。自分のため身を棄てやうといふ部下を一人残して立ち去る心にはどうしてもなれないのである。

「そなたの志はまことに有難い。屋島の戦でそなたの兄の嗣信が身代りになつてくれたのをさへ、この上なく思つてゐるのに、今又そなた一人をどうして見殺しに出来ようぞ。わしは來年の正月には奥州に下るつもりぢや、お前も一しよに行つて、故郷の父母妻子に逢ふがよい」

懇々と諭したが、さう云はれると忠信はいよゝゝ決心を固めるだけである。かくまで情ある大將のために命を棄てるこそ、武士たるもの、本望ではないか、忠信の胸は感激に充ち溢れた。

「そのお言葉でもう十分で御座ります。思へば治承四年の秋、故郷の

奥州を立ち出るとき、君の馬前に討死して名を後の世にあげよとは父母から呉々も諭されたことで御座ります。生きて歸へるまいと家を出るときから覺悟致しました。今更、誰にも逢ひたいとは思ひません。兄の嗣信は屋島の浦で君の御用に立ちました。今日こそ忠信の命を差し上げる時で御座ります……。

「さあ、各々方も宜しく君に申上げ下されい」

忠信は顔をあげて人々を見廻した。すると辨慶が進み出て、

「弓矢取る者が一度云ひ出したことを、後には引かれませぬ。この上は忠信に氣持よくお暇を下されるがよう御座る」

と勧めたが、義経はなほも頭をたれてしばらくは物思に耽りつてゐた。しかし、いつまでかうして居つたとて果てしが無い。漸くあきらめて徐かに

云つた。

「さほどまで思ひつめたことなれば、留れと云つても留るまい。この上はいかにもそなたの望にまかせよう。

ちやが、そなたの太刀は少し長いやうぢや、疲れてくると困るぢやらう。これで最後の軍をするがよい」

と、腰にさしてゐた二尺七寸の黄金造の名刀をぬき取つて忠信に授けた。忠信はそれをおし戴いてまはりの人々に云つた。

「兄は君の御命に代つたとき名馬を頂戴致しました。私は僅かの忠義をするとして、この名刀を戴きました。各々、人の事と思つてはなりませぬ。誰もこの通りで御座りまするぞ」

と、有難さの餘り、はら／＼と涙を流した。流石の勇士達も背手を顔にお

し當てた。

義經も、目をしばたいて、

「あゝ、これでこの世の別になるか、申し残すことがあらば傳へようぞ」

と、云ふ聲も涙に曇らうとする。忠信は畏つて答へた。

「もう何も申し残すことは御座りませぬ。たゞ一つお許しを蒙りたいことが御座ります。今にも吉野法師共が押し寄せて参つたとき、忠信と名乗つては何の甲斐も御座りませぬ。御免を蒙つて君の御名を名乗り申さうと存ずるので御座る。但し力盡きて腹を切るときは私の本名を名乗ります、かくすれば君の御名を汚すことにはならぬと思ひます。何卒、この事、お許し下されい」

「うむ、そのことなら何でもなし。して、そなたの着てゐるのはどんな鎧ぢやな」

「はい、これこそ、兄嗣信が最後の時に着たもので御座ります」  
それを聞くと義經は眉をひそめた。

「何、嗣信の鎧と申すか。能登殿の矢先に叶はなかつた鎧では、心細く思はれる。法師共の中にも強弓の者があぬとも限るまい。これを着ろ、お前の鎧はわしが着る」

義經は自分の着てゐた緋緘の鎧を脱いで忠信に授けた。忠信はまたも泣かずをれなかつた。涙ながらに受取つて着換へれば、義經は忠信の脱いだ鎧を手早く身につけ、

「ぐづぐづしてをるわけには参るまい、忠信、さらばぢや」

思ひ切つて立ち上つた。そして見返りく、奥へ奥へと雪を踏み分けて山の上に急いだのである。

跡に残つたのは忠信と、その家來六人ばかりである。雪を集めてつみ重ね、五六本の立木を小楯にとつて、敵こそ來れと待ち受けた。勇士の決心、それは鐵のやうに堅かつた。

しばらく待つてゐると、やがて麓の方からがやく人聲が聞えて來た。

「いよくやつて來たやうだぞ」

忠信始め七人はきつと麓の方を見下した。敵はすべて三百人あまり、だんだん近く登つて來て、忠信等を見つけると、どつと関の聲をあげた。忠信等も負けぬ氣でそれに合せて聲をあげた。

すると敵の中から大將株と見える法師が、五六人の者を引連れて進み出

で、

「判官殿（義經のこと）がおいでになると承つてお迎へに參つた。

我々共は別段怨みがあるといふわけでも御座らぬ。一先づ落ち延びるかそれとも討死なされるおつもりか、御返答はいかゞで御座るつ」と聲高らかに呼ばつた。忠信は起ち上つて答へた。

「おう、清和天皇の御末九郎判官殿がおいでになることを今の今まで知らなかつたか。無禮の振舞して後悔するな、小法師共つ、かく申すは佐藤四郎兵衛忠信なるぞ」

小法師共と云はれて、吉野法師共は眞赤になつて怒つた。

「何を、この上は問答無益、それ討取れつ」

とばかり我も我もと攻め登つて來た。忠信はそれを見ると、家來達にこゝ

で防げと命じておいて、自分は唯一人そつと廻つて敵の横側に出た。敵は前にはかり氣をとられて、忠信には氣がつかない。そこを見澄まし、尖矢を番へてひやうと放つたところが、一人の勇僧は腕を射抜かれてはつたりと倒れた。

「あつ」

と驚く敵を尻目にかけて、忠信は大音聲に呼ばつた。

「者共進めつ、伊勢三郎、熊井太郎はゐるか、大手から進め、鷲尾三郎、片岡八郎、武藏坊辨慶はどこぢや、搦手も進め、あの奴原、一人も残さず討取れやつ」

と、人も居ぬのに、いかにも澤山の兵が隠れて居るやうに呼び立てると、敵はすつかり度膽を抜かれた。

「やあ、敵は皆戦に慣れた勇士達ぢや、近づいては叶はない、一先つ退けつ」

と口々に叫びながら我先にと麓の方にかけて下りた。忠信始め七人の者共は走り出て、敵の残していつた楯を拾ひ集め、すばやく麓に向けてたて並べた。そしてさも氣持よげに、互に顔を見合せてどつと笑つた。

法師共は楯をとられて残念で耐らない。この上は敵を射殺せと、弓をそろへて散々に射た。矢の飛んでくる有様は蝗の飛ぶやうである。

しかし忠信はちつと楯の陰に隠れて一時間あまりも陣を守つたまゝ動かない。六人の家來達はさつきから腕がむづ／＼して耐らなくなつてゐる。「いつまでかうしてゐても面白くない。花々しく戦つて討死するまで

ぢや」



と、決死の勇氣に溢れた面々、皆一齊に躍り出で敵陣に駆け入らうとした。忠信は驚いてそれを押しとどめた。

「待て待てつ、法師共は今日始めてやる戦ぢや、今に見ろ、矢を射盡してしまふから。その隙を目掛けて射よ、味方の矢種が盡きてから斬り廻つても遅くない。あはてるな〜」  
と、逸りに逸る部下の者を押へて、なほもぢつと動かないであた。その内に果して敵は矢を射盡してしまつた。

「さあ、今度は此方の番ぢや」  
忠信始め、矢をとつては放ちとつては放ち、争つて散々に射た。弦音に應じて法師共は、ばた〜と倒れる。見る〜五六十人ほど射殺された。  
「判官は劍術の達人ぢやといふことは、かねてから聞いてゐたが、こ

れはまた何といふ恐ろしい弓勢ぢや」

法師達は皆舌を巻いて驚いた。

しかし、やがて味方の矢種も盡きてしまつた。

「どりや、この上は斬り死に、死ぬとするか」

とばかり、六人の家來達は楯の陰から躍り出で躍り出で、群がる敵の中に割つて入つて、當るを幸、斬りまくつたが、敵に取り圍まれて皆片端から斃れてしまつた。生き残つてゐるのは忠信一人である。しかも少しも弱らない。

「これからだ。思ふ存分戦つてくれう」

と箴を探つて見ると、まだ二本の矢が残つてゐる。これでよい敵を討ち取りたいものだ。と敵の様子を窺つてゐると、一人の法師が、そのとき勇まし

く走り出で、倒れてゐる大木の上にひらりと飛びのつた。身の丈六尺ばかり、手には弓を持つてゐる。忠信の方を見て叫んだ。

「源氏の郎等は皆討たれ、味方も多く討ち取られた。この上は源氏の  
大將軍と吉野法師の大將と、一騎討の勝負仕らう。かく云ふは横  
川覺範と申す者、矢一つ判官殿に參らせよう」

と云ひもあへず、四人張りの強弓に十四束の矢を番へ、ひゆうときつて放  
せば、矢は忠信の左を危くも掠め、後の椎の大木にぐざとばかり突つ立つ  
た。

「えらい弓勢ぢや、油断がならぬぞ」

忠信も流石に驚いたが、敵は一の矢を射損じたので二の矢を射るに違ひな  
い、胴中を狙はれたらおしまひだと思つたものだから、すばやく自分も矢

を番へて射返さうとした。しかし矢頃は少し遠かつた。風も谷から上に吹  
いてくる。

「射ても中らず、中つても鎧をとほすことが出来なかつたら武士の耻  
ぢや。これは人よりも弓を射るのが上分別ぢやわい」

と心にうなづいて、狙ひ定めてはつしと射た。

覺範は一の矢を射損じて、

「南無三、しまつたか」

と、また二の矢を番へ、きり／＼と引絞つて、「えいつ」と放さうとした。  
そのとき、早くも忠信の矢が飛んで来て、かつきと弓を射切つたのである。  
そこで覺範は弓を投げすて、三尺九寸の大刀を抜き放つて、驀地に雪を  
蹴立て、駆け上つて来た。忠信もまた、三尺五寸の太刀をひん抜き

「さあ、来い」

とばかり身構へた。勇僧と猛士、互に隙を狙つてはうちこんでゆく。右に飛び違ひ、左に避け、はつし〜と火花を散らして斬り合つた。白雪は浪の飛沫のやうに飛んだ。

必死になつて闘つたが勝敗は決しない。二人はだん〜疲れて来た。それと見て法師武者七八人が走り寄つて覺範を助けやうとする、しかし覺範は、それを叱り飛ばして手を出させない、わざと一人で忠信と斬り結んだ。忠信は太刀をさつと投げつけた。覺範の兜はそれに中つて地に落ちた。忠信はすかさず佩き添への太刀を抜いて斬りつけたが、巧によけられたので傷は浅い。覺範は傷を受けて益々怒つて進み寄つてくる。外の法師達も斬つてかゝつた。

忠信はぢり〜と退いた。そしてひらりと身を蹴すと、二三丈もある崖を飛び下りた。覺範もその後を追つて同じく飛び下りた。下り立つ拍子に鎧の袖が木に當つたので覺範は思はずよろ〜となり、踏み止ることが出来ないで、そのまゝころ〜と忠信の側に轉げて来た。

起き上るところを忠信は少し身體を開いて、さつと太刀をうち下した。刀はよい、腕はすぐれてゐる。一耐りもなく、覺範は頭を眞二つに割られて、うんとも云はず息は絶えた。

忠信は覺範の首を取つて刀にさし貫き、敵を見渡して呼はつた。

「横川覺範の首を義經が討ち取つたぞ、弟子の者共も居るであらう、それつやるぞつ」

と、首を取つて敵の中に投げつけた。

「覺範さへ叶はぬのぢや、これは、我々の手に合ふ敵ぢやない」と、法師共も恐れて進むことが出来なかつた。忠信はその隙にどん／＼走つていつた。そこで、はつと氣付いてあとから追ひかけてゆく。

流石に、忠信も腹は空るし身體は疲れてゐる、もう戦ふことも出来ない。そこで追ひかけてくる法師共を見下し、

「法師共、よつく聞け、ほんとの判官殿は、とうの昔に落ちさせられただぞ。我こそは佐藤四郎兵衛尉忠信ぢや。剛の者の腹切る様を見ている後物語にせい」

と叫びながら、刀を抜いて左の脇腹に突つ立て、忽ち崖を飛び下りた。これには吉野法師も呆れてしまつた。

「何といふことぢや、判官殿ではなく、佐藤四郎兵衛尉であつたのか、

欺されて多くの人を討たれたわい」

と、愚知だら／＼引き上げる外はなかつた。ところが忠信は死んだ振りをしたので、ほんとは死なかつたのである。山を越え谷を渡り、とう／＼無事で京都に歸つた。

さて、かうして忠信が吉野法師を防いでゐる間に義經主従は山奥深く落ちていつたのであるが、次の日になると、忠信に欺されたので癪に觸つて耐らぬものだから、義經はまだ山の中に居るに違ない、是非討ち取らねばならぬといふので、又もや百五十人ばかりの者が山を登つて義經のあとを追ひかけたのである。

餓と疲れに悩みながらも、あとから敵が追ひかけてくるので、義經主従は少しも休む暇もなかつた。なほも雪の山路を踏み分け踏み分け、奥へ奥

へと入つていつたが、ふと後を見ると、雪の上には、足跡が點々としてゐる。これでは行く先を敵に知らせるやうなものである。辨慶は早くもそれに氣付いて

「さあ、皆、わしの真似をするんだ」

と云ひながら、草鞋を逆さに、はきかへた。

「梶原は逆櫓の計で殿に笑はれたが、これは辨慶の逆履の計、かうして敵を欺すので御座る」

と云ふので義經始め皆笑ひながら辨慶のするとほりに真似て進んでいった。

吉野法師は雪の上に残つてゐる足跡を辿りながらどこまでも追ひかけて来た。ところが、ある谷陰に来てそこから足跡が變つてゐるのに氣がつ

いた。

「おや、これはおかしいぞ。今までは足跡が彼方に向いてゐたのに、

こゝから先は此方に向いてゐる。はてどうしたものだらう」

辨慶が考へたとほり、果して吉野法師はこれからどつちの方角に追ひかけたらいゝか迷つてしまつたのである。しきりに考へてゐると、一人の法師が、はたと横手をうつて云つた。

「わかつたつ、これは昔印度の王様がやつた逆履の計といふやつちや、判官殿の家來には武藏坊辨慶などいふ法師があるから、きつとそれを知つてやつたことぢやらう。なに、たゞこの足跡についてゆきさへすればいゝのぢや」

と氣付いたものだから、またも急いでその足跡を辿つてゆくのである。

しかし、もう少して追ひつかれるといふところで義經主従はやつと危険をのがれることが出来た。吉野川の上流を渡つて川向に着いたのである。そこまでは吉野法師も、もう追ひかけては來なかつた。そこで始めてほと息をつくことが出来たのである。

けれどもそこからまた里に近くなつた。大勢そろつてゐては人に怪まれるもとである。そこで、來年の正月か二月の始には奥州に下るから、それまでに京都に寄り集らうといふ約束をして、皆思ひ／＼に分れてしまつた。

義經は人目を忍び方々を隠れ歩いてその年の暮、京都に辿りついた。そして一つ所にゐると見つけ出されるから、今日は北山、明日は東山といふ風に隠れまはつてゐたのである。

これより先、佐藤忠信は、京都に來て、隠れてゐたがとう／＼東國の武士に見つけられてしまつた。一時は無事に切り抜けたが、つひに捕手に迫られて見事に腹を切つて死んだ。鎌倉の頼朝は忠信の最後の有様を聞くと、東國にもこれほどの者はをるまい、天晴な者ぢやと云つてしきりに感心したといふことである。

### 五 奥州落

奥州には藤原秀衡がある。昔、義經が世話になつた人である。義經はまた秀衡の所に身を寄せようと思つたのである。

翌年の二月になると、吉野の山奥で分れ／＼になつた家來達が約束どほりに皆集つて來た。そこで途中人目を避けるため、義經始め武藤坊辨慶、

片岡八郎、鷲尾三郎、伊勢三郎等、主従合せて十六人は、皆山伏の姿に身を變へ、北陸道を下つて奥州に向つた。

肥れた馬に跨つて大軍を指圖した英雄も、今は笈を肩に、みすばらしい姿で、とぼくと歩まねばならなかつた。頼朝の命令をうけた國々の武士達は、方々で嚴重に見張つてゐた。一行は何へんか危い目に合つたのである。殊に加賀の國の安宅の關所にかゝつたとき、そこを守つてゐたのは富樫左衛門尉といふ武士であつた。いつとはなしに義經が山伏の姿になつて奥州に下るといふ噂が立つたものだから、殊に嚴重に見張つてゐる。一行は忽ち怪しまれて、嚴しく咎められた。しかし辨慶が早速の機轉でうまくいひわけをしたので、無事にそこを通ることが出来た。これは謠曲や芝居に傳へられて有名な話になつてゐる。

かうして危いところを切りぬけ、山に寝たり野に臥したりしながら漸く越後から出羽に入り、秀衡の館のある平泉の近くに着くことが出来た。こゝまでくればもう安心である。義經は家來をやつてこの事を秀衡に知らせた。秀衡は非常に喜んで、その子の泰衡に百五十騎を率ゐさせ、義經を迎へにやつた。そして自分の館の近くに高館といふ館を築いて義經を住ませ、日々の食物は固より、馬や鎧のやうなものまで何不自由なくやつて、丁寧にもてなしたのである。

この秀衡の先祖は清衡といふ人で後三年の役に義家に従つて功をたて、それからずつと奥羽二國を領して、土地は廣い、産物は多い、非常な勢であつたから、流石の頼朝の威勢もこゝまでは届かない。義經がこゝに來たことを聞きつけて、頼朝は朝廷に申し上げ秀衡を責めたけれど、秀衡は少

しも恐れないうでいよ／＼大切に義経をもてなしたのである。長い間、あちらこちら隠れまはつて一日も安らかな日のなかつた義経も、こゝで始めてやつと手足をのばしてゆつくりすることが出来たのであつた。

しかし、世の中のことは都合のよいやうにばかりはゆかぬものである。安心したのも束の間、義経にはやがて悲しい運命が迫つて来た。それは頼みにした秀衡が年をとつて死んでしまつたことである。

秀衡は自分の命がもうないと知つたとき、泰衡始め子供等を集めて遺言した。

「もし自分が死んだといふことを聞くなら頼朝は必らず判官殿を討つと云つてくるに違ない。しかし決してそれを恐れてはならぬぞ、使はずぐに斬つて捨てい、一度二度かうしたならば、頼朝もそのまゝ

にはしておくまい。こちらはその用心をしておかねばならぬ。判官殿を大將とし、念珠、白河の二關を塞ぎ奥羽二國の兵を集めて戦つたならば、日本國中の兵を敵に受けても、敗ける氣遣はないぞ。この遺言さへ守るならば、そち達の行末は少しも心配がないのぢや、くれぐれも判官殿に、そそうがあつてはならぬぞよ」

自分が死んだ後のことを心配して、秀衡は細々と子供達に訓へたのである。しかし秀衡の後を嗣いだ泰衡は考の足りぬ人であつた。果して鎌倉からは義経を討つといふ嚴重な催促が来たのである。一度二度は断はつたが度重なると、泰衡も漸く心配になつた。とう／＼頼朝の威勢に恐れて情なくも義経を討つと決心したのである。

義経は秀衡が死んだのを非常に悲しんで一時はたゞぼんやりと何も手に



つかぬ日ばかりが續いたのであつた。そして泰衡の頼みにならぬことはとうから見抜いてゐたから、また別の所にひき籠らうと思つたのであるけれど、せめて秀衡の三年目の法事でもすんでから後にするのがなき人への禮儀でもあらうと思ひかへして、高館に居つたまゝ淋しい月日を送つてゐた。そして、まさか、かう早く泰衡が自分を討たうとしてゐる等とは夢にも氣づかなかつたのである。

### 六 高館の露

泰衡は、突然、一萬餘騎の大軍を遣はして、高館を攻めさせた。まさか今日とは思ひもかけなかつたことだから、義經の家來も生憎留守で、残つてゐるのは辨慶を始め僅に十人餘りである。氣がついたときには高館のま

はりには皆敵の兵で埋まつてゐた。これではいかな英雄も助かることは思ひもよらぬことである。義經始め皆覺悟をきめてしまつた。

その内に寄手はだん／＼門の前に近づいてどつと関の聲をあげた。寄手の大將は泰衡の家來の長崎二郎大夫といふ者である。それを聞くと義經は、

「せめて泰衡が寄せたとあらばとも角、かゝる下郎に向つて弓引くは

わしの名折ぢや、義經の運も今日限り、もう見苦しく騒ぐまい」

と云つたまゝ、奥の間に入つて靜かに經を讀み始めたのである。

辨慶始め家來の人々は、口惜しさに齒を喰ひしはつて、おつと耐へてゐたが、寄手がいよ／＼近づいて、今にも館の中にこみ入らうとしたとき、辨慶はすつくと起ち上つた。

「殿の仰せもさることぢやが、このまゝ自害するのも残念ぢや、生命

限り戦はうでは御座らぬか」

かう云はれて人々も皆賛成した。それではといふのでそれ／＼手分けして立ち向つたのである。搦手に向つたのは増尾兼房、喜三太の二人、櫓の上に登つてしきりに矢を放つた。大手に向つたのは辨慶を始め片岡經春、鈴木重家、龜井重清、鷺尾經春、備前成實等の面々である。勇士達は千倍の敵を泥人形ほどにも考へてゐなかつた、辨慶は

「どりや、我々の膽玉を見せて敵兵共を驚かしてくれう。囃して下さ  
れ」

と云ひながら、扇をひらいて櫓の上で舞ひ始めると、重家、重清の兄弟はこれも扇をとつて、ばた／＼と板をたゝきながら歌をうたつた。敵兵は之を見ると思はず笑つてしまつた。

「寄手は一萬、城兵は十騎もない。あれ見い、あの者共は氣が狂つたぞ」

笑はれて辨慶は眞赤になつて怒つた。

「一萬も一萬により十騎も十騎によるぞ、我等の手並を見て驚くな」と、重家兄弟と三人、門を開いて駆け出し、群がる敵の中に割つて入つた。辨慶の勇猛なことは奥州のはてまでもなり響いてゐる。寄手はそれを見て、こりや叶はぬと四方に逃げ走つたのである。それをどこまでもと追ひかけながら三人は暴れまはつたのである。鈴木重家は見る／＼五騎を倒し七八騎を傷けた。しかし自分も重傷をうけたので、弟をふり返り、

「六郎、犬死するな、わしはかうぢや」と云ひながら腹切つて死んだ。重清も敵の中に突進し、三騎を斬つて落し、

六騎を傷けて、兄と一しよに枕を並べて自害した。

そのうちに備前成實も鷲尾經春、片岡經春も皆打つて出た。いづれも力の限り奮闘し多くの敵を討ち取つたが力盡きて備前も鷲尾も相續いて討死した。搦手の増尾、喜三太の二人も傷を受けて倒れた。今は生き残つたのは辨慶と片岡經春の唯二人である。

辨慶は先程から大長刀をうち揮り、縦横無盡に荒れまはつてゐた。はね返る敵兵の血を浴びて黒絲絨の鎧も緋絨のやうになつてゐた。敵兵は恐れて近づかない。辨慶は大手をふつて敵を睨みながら悠々と歩きまはつた。その中に味方は二人きりになつたのである。

「どれ、今一度お目にかゝつて来よう」  
ひき返して奥の間に入り、



「殿、殿、辨慶がまゐりました」

と聲かけると、義経はしきりに經を續んでゐたが、しづかに見返りながら、辨慶から味方は二人きりになつたと聞いても驚かない。

「一しよに死にたいのぢやが、自害の場所に入られては弓矢の恥ぢや、

そちは今しばらく死なずにわしを守つてくれい」

また、餘念もなく經に讀みふけた。辨慶は近寄つてちつと義経の顔を眺めながら思はず涙にむせんだ。

さうするうちにも敵は近寄つてくる。

「さらばで御座る」

と言ひすて、走り出たが、またひつ返し、今一度覗きこんでやがて走り出た。

「片岡つ、後を防いでくれ、わしは前ぢや」

二人は前後に分れて進んでゆくと、敵兵は、また退いて押し寄せない。片岡は逃げる敵を追うてしばらく戦つたが、やがて身體中に傷をうけ、今はこれまでと、鎧をぬぎすて、腹かき切つて倒れたのである。

いよ／＼辨慶一人だけになつた。

「さらばかうぢや」

と長刀の柄を一尺ばかり切りすて、ひゆう／＼と振りまはし／＼、敵の中に飛びこんで、人といはず馬といはず當るを幸、薙ぎ倒した。敵は皆遠くににげて、矢を雨の降るやうに射かけた。辨慶の鎧には、みる／＼簀を着たやうに矢が立つた。

荒れまはつてゐた辨慶はやがて長刀を杖つき、つつ立つたまゝ敵を睨んで、